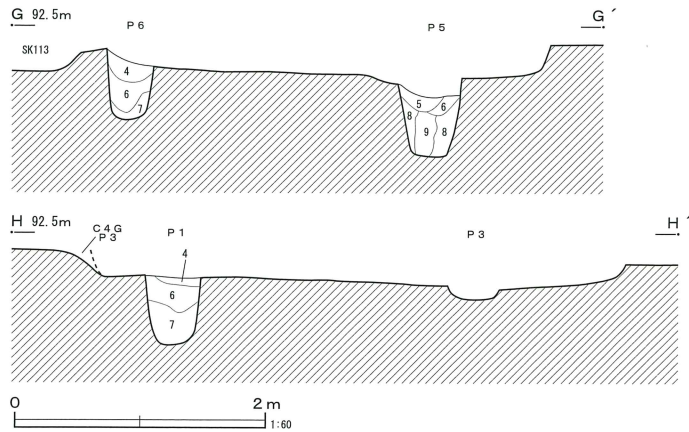
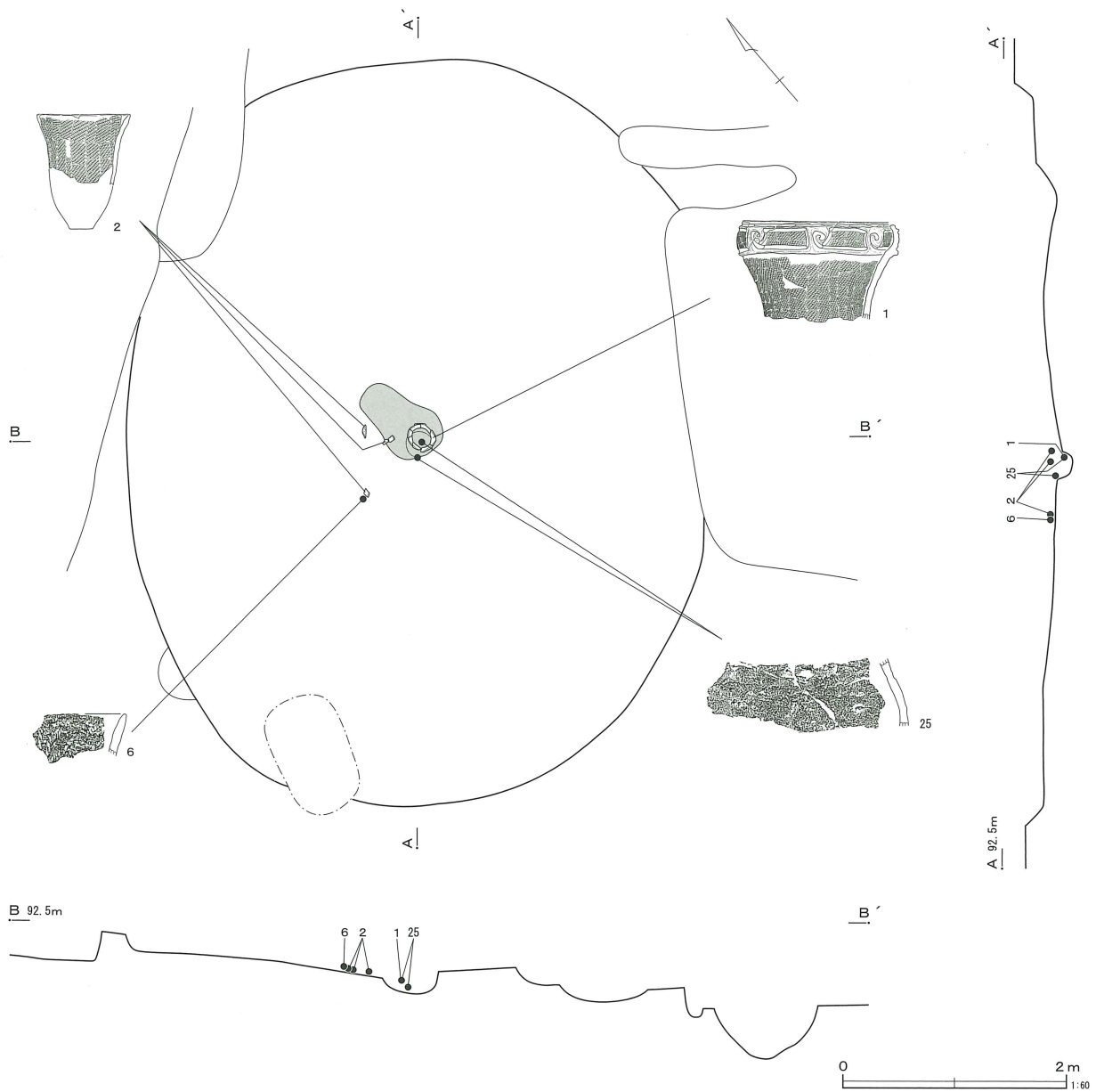


第34图 第18号住居跡 (1)

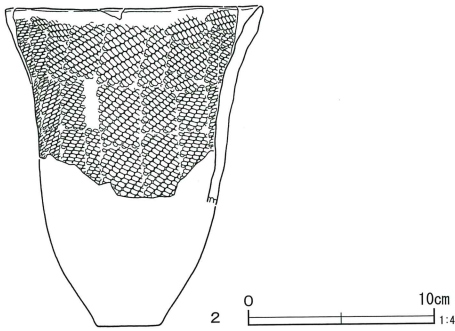
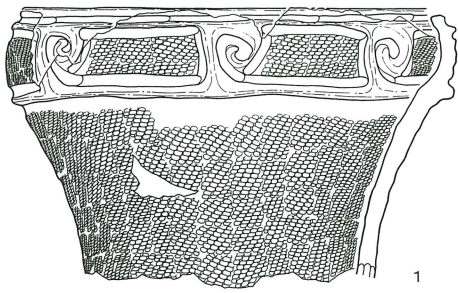


- SJ18
- 1 暗黒褐色土 黒色土主体 細かなローム粒子多量 焼土粒子少量
  - 2 暗黒褐色土 1層よりも暗色を呈する 地山土層の大粒ブロック多量
  - 3 暗黄褐色土 ローム主体 黒色土微量
- SJ18 ビット
- 4 暗茶褐色土 ローム土・黒色土含む
  - 5 暗茶褐色土 ローム土多量 黒色土含む
  - 6 暗黒褐色土 4・5層よりも暗色を呈する 風化したロームブロック含む 炭化物粒子少量
  - 7 暗黒褐色土 4・5層よりも砂質である
  - 8 暗黒褐色土 ローム土・黒色土含む 縮まりややあり
  - 9 黒褐色土 黒色土主体 ローム粒子・炭化物粒子含む 焼土粒子微量 柱を抜いたものと考えられる

第35図 第18号住居跡 (2)



第36図 第18号住居跡遺物出土状況



第37図 第18号住居跡出土遺物 (1)

第18号住居跡出土遺物

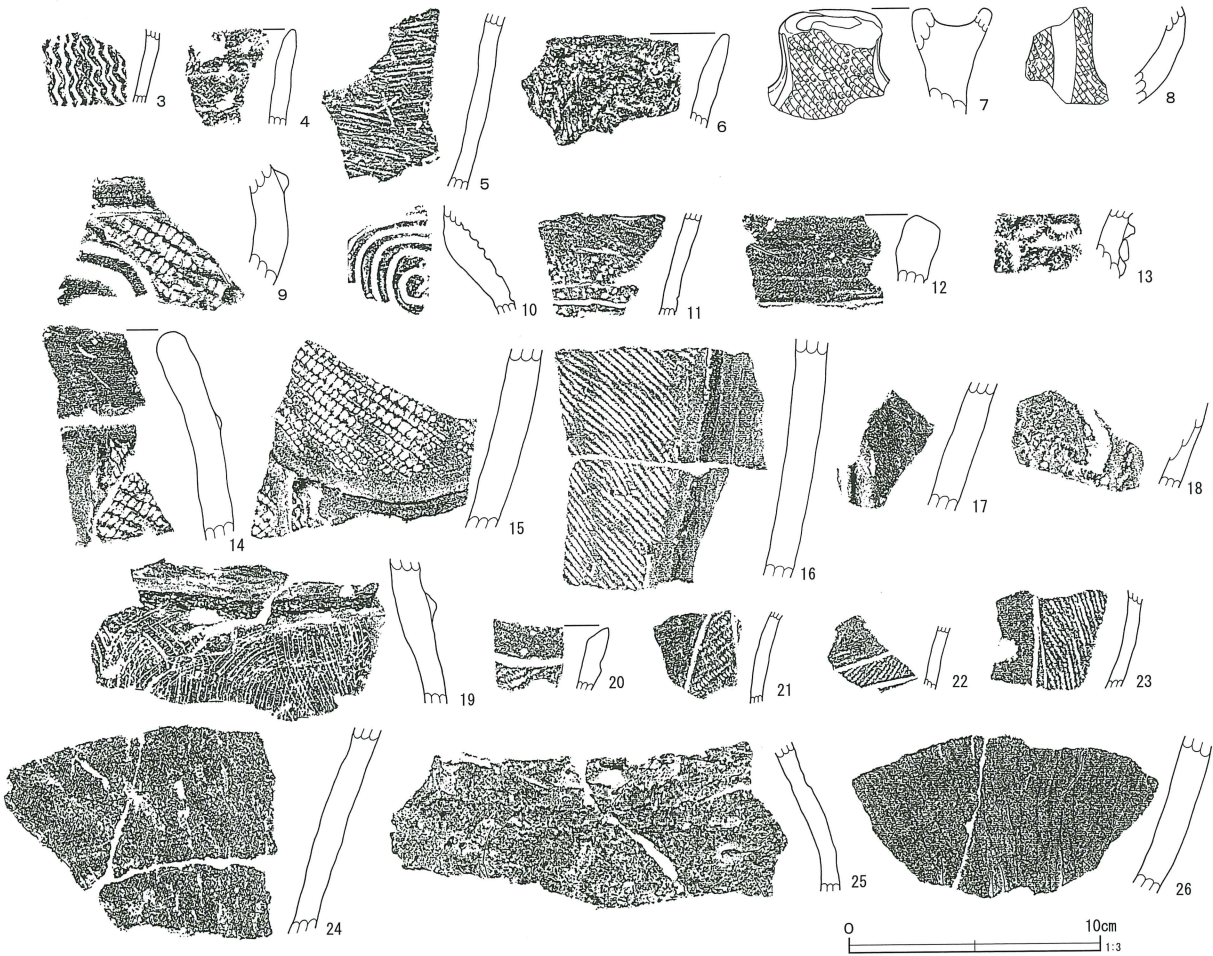
土器 (第37・38図)

1は炉体土器で、加曾利E II式のキャリパー系深鉢である。口縁から胴部中段にかけて残存する。

口縁部には渦巻文と長方形の区画文が交互に配される。頸部無文帯を持たず、胴部は全面縄文が施文される。地文はRL単節縦位回転の縄文である。最大径24.3cm・現存高14.9cmを測る。

2は縄文のみ施文される小型深鉢である。口縁から胴部中段にかけて残存する。器形はごく緩いキャリパー形を呈し、口縁は軽微に外反して断面先細りを呈する。地文はRL単節縦位回転の縄文である。最大径13.8cm・現存高10.5cmを測る。胎土に砂・小礫を多く混入し、器壁は多孔質である。

3～6は覆土に混入した早・前期の土器である。



第38図 第18号住居跡出土遺物 (2)

3は押型文土器で、山形押型文が縦位回転で施文される。4・5は早期末葉の条痕文土器である。4の口縁は篋状工具先端の刺突列が2条垂下する。

6は前期の諸磯式であろう。LR単節の粗大な縄文が横位回転で施文される。

9は加曾利E I 式の口縁部文様帯である。10は同時期の浅鉢で、沈線による同心円文が施文される。

11は深鉢胴上半部で、頸部無文帯と胴部の縄文施文部を区画する横位の平行沈線がみられる。12は浅鉢口縁部で、後期後半のものであろう。13は曾利式の頸部で、横位の隆帯間に波状の浮線文が巡る。

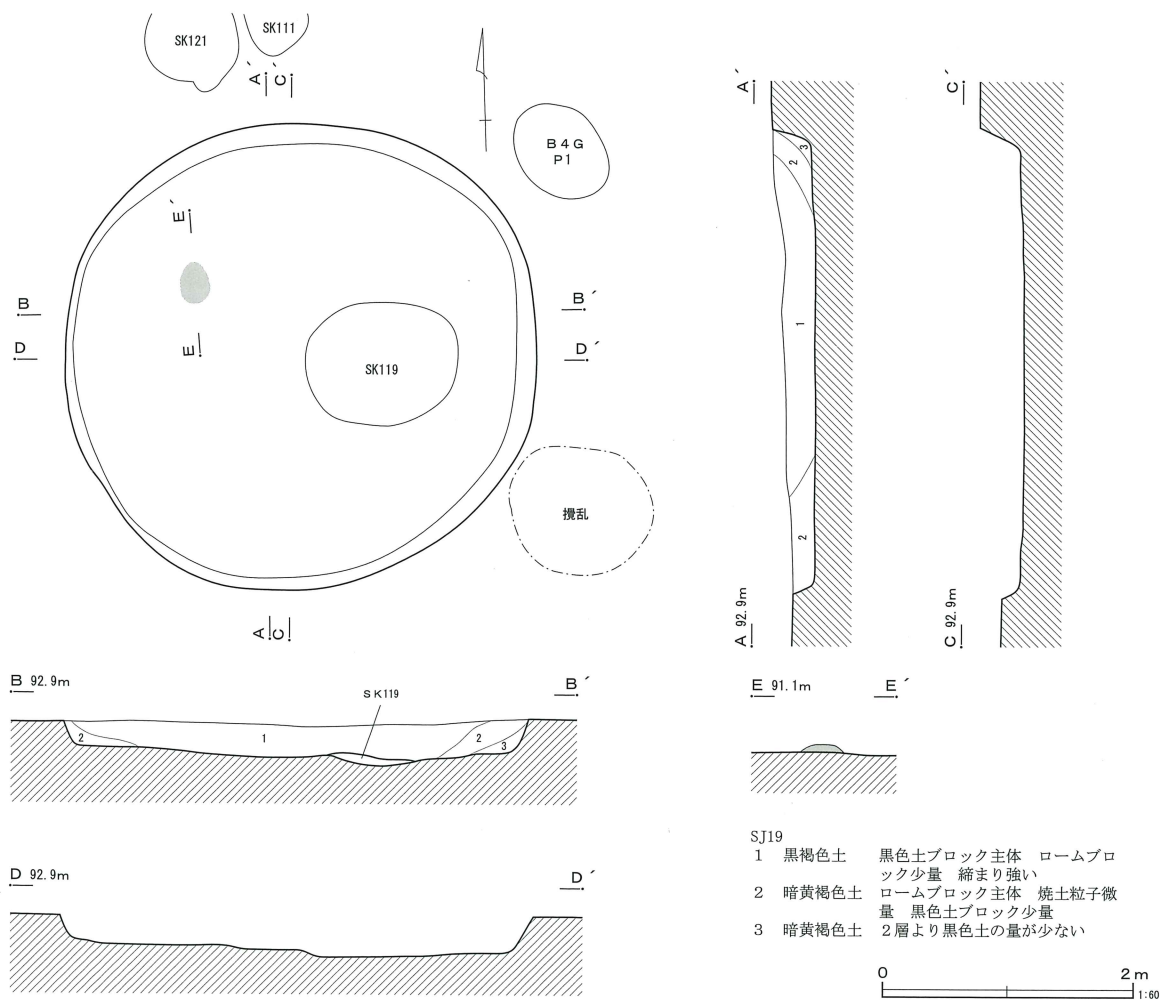
7・8および14以下は中期末～後期初頭の土器群で、大半が加曾利E系の土器である。

14は胴張りの大型深鉢で、口縁部に無文帯を持ち、胴部には幅広の磨消懸垂文が垂下する。15は微隆起

線で描かれた曲線文に、やはり微隆起線で構成される磨消懸垂文が接続するもので、キャリパー類の口縁部文様帯下端ないし大柄の渦巻文を描く梶山類に属するものであろうか。16・17は磨消懸垂文の一部である。18は縄文施文部に波状の隆帯が垂下するものであるが、隆帯部分は剥落している。

19は両耳壺の胴部である。胴上半部の文様帯を持たず、頸部との境を1条の隆帯で区画する。地文は櫛歯状工具による波状の集合沈線である。7・8および20～23は小型精製深鉢で、称名寺式が含まれる可能性がある。7は柱状の突起で上部に渦巻文を配するもの。8は橋梁状の小把手で背面に太沈線を伴う。20は内湾する波状口縁、22はJ字文の末端部である。21は逆V字状の区画で、胴下半部である。

24～26は無文の胴部破片である。



第39図 第19号住居跡

第19号住居跡 (第39~41図)

B-3・4グリッドに所在する。第119号土坑を切っている。ほぼ円形の竪穴住居跡で、長径3.78m、短径3.72m、深さ0.32mを測る。長軸はN-88°-Wを指す。

壁の立ち上がりは明瞭で、壁溝はみられない。床面はほぼ平坦である。床面上からピットは検出されなかった。

北西壁から床面中央へ約1mのところに焼土溜りが存在し、これを炉跡と判断した。焼土の堆積する範囲は長径34cm・短径24cmの範囲で、掘込みは存在しない。主軸はN-3°-Wを指す。

第19号住居跡出土遺物

土器 (第42図)

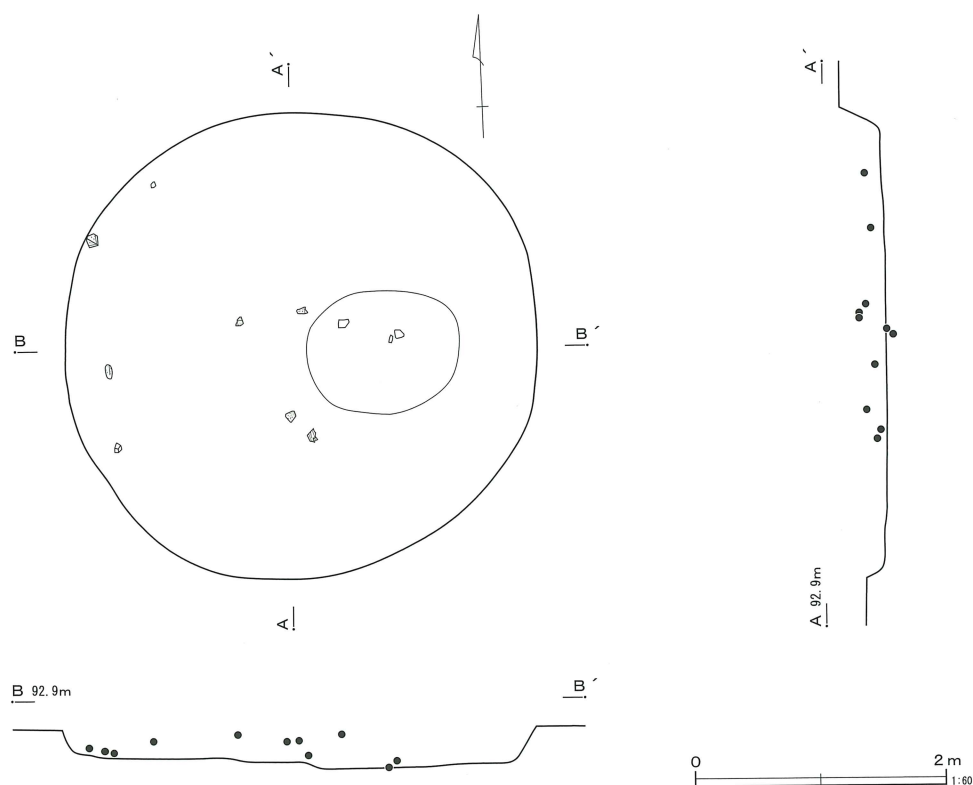
1は加曾利E II式の胴部で、地文縄文上に平行沈線の懸垂文が垂下する。2は曾利II式で、地文縄文の土器である。頸部を波状の浮線文で区画しており、胴部には波状の浮線文および2本一組の隆帯が垂下する。

4~7は中期後半~末葉の土器である。4は縦位の集合沈線を地文とする深鉢である。5は矢羽根状の沈線を地文としており、唐草文系の深鉢と考えられる。6は地文縄文上に集合沈線が描かれる。7は無文の口縁部で、加曾利E式に伴う浅鉢口縁部と考えられる。

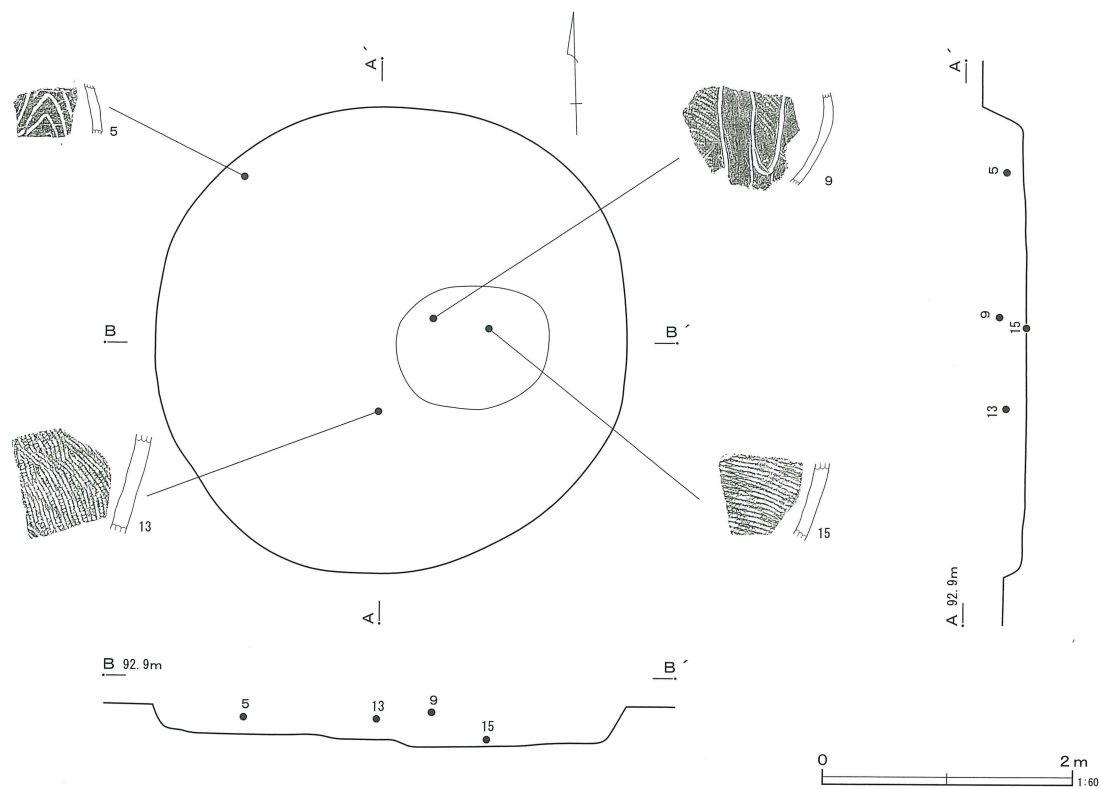
8~12は後期初頭の土器群である。8・9は小型精製深鉢である。8は口縁部である。緩やかな波状口縁で口端強く内屈し、鋸歯状の磨消モチーフが描かれる。9は胴上半部で、H字状のモチーフが描かれる。

10は両耳壺の胴上半部である。胴部に深鉢と共通の磨消モチーフが描かれ、頸部無文帯との境を断面三角形の隆帯で区画する。11・12も磨消縄文の胴部破片である。

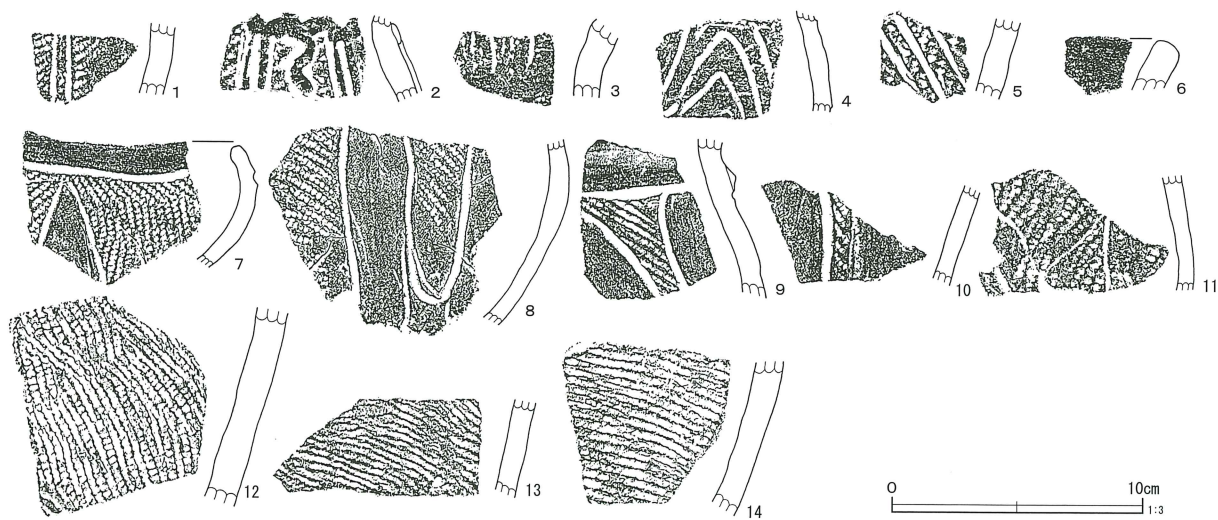
13・14は縄文のみ施文される胴部破片である。いずれも厚手の器壁で、胴張りの大型深鉢に伴う可能性が高い。施文はいずれも右下がりの回転となっている。



第40図 第19号住居跡遺物出土状況 (1)



第41图 第19号住居跡遺物出土狀況 (2)



第42图 第19号住居跡出土遺物

## (2) 土坑

### 第72号土坑 (第43・44図)

D-5グリッドに所在する。不整楕円形の土坑で、長径1.04m、短径0.86m、壁高0.42mを測る。主軸はN-83°-Wを指す。壁は直線的に開く摺鉢状の立ち上がりを呈し、底面は平坦である。

覆土の下層を中心として若干の遺物が出土した。底面からは第46図1とした両耳壺の把手および胴部の破片が出土している。

### 第72号土坑出土遺物

#### 土器 (第46図1、第47図6~17)

1は両耳壺である。肩部から胴下半部まで断片的に残存する。頸部と胴部の境を1条の微隆起線と幅広の沈線で区画し、この部分に一对の橋梁状把手を配する。字文はRL単節の縄文であり、部分的に櫛歯状工具による集合沈線文が併用される。胎土に小礫が目立ち、器壁は脆弱である。

6は小型精製深鉢の口縁部である。強く内湾する波状口縁を呈し、胴部には鋸歯状の磨消モチーフが描かれる。7は牛蛭式に類似する大型寸胴の深鉢口縁部である。口縁下に幅狭の無文帯を持ち、胴部縄文施文部との間を1条の沈線で区画する。

8~13は磨消懸垂文がみられる胴部破片である。14~16は縄文のみの胴部である。14・16は下半部の地文が部分的に磨り消されていることから底部付近の破片であることがわかる。

17は底部で、比較的薄手であり強く外反する器形から、両耳壺ないし浅鉢に伴うものである可能性が高い。

### 第88号土坑 (第43・45図)

C-4グリッドに所在する。北西壁の一部をピットに切られる。不整円形の土坑で、長径0.83m、短径0.72m、壁高0.36mを測る。主軸はN-83°-Eを指す。

壁の立ち上がりは比較的急で、底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構検出面直下から

第46図2の深鉢底部が出土した。

### 第88号土坑出土遺物

#### 土器 (第46図2、第47図18・19)

2は比較的大型の深鉢で、胴下半部から底部にかけて残存する。底部の直上で括れた後、胴部中段へと直線的に開く器形である。胴部には2本ないし3本一組の沈線を用いた磨消懸垂文が施文される。地文はRL単節の縄文で、右下がりに施文される。

18は無節のごく浅い無節縄文を地文とし、沈線が垂下する。19は無文の底部である。いずれも中期末~後期初頭のものともみられる。

### 第116号土坑 (第43図)

D-4グリッドに所在する。不整楕円形の土坑で、長径1.08m、短径0.76m、壁高0.20mを測る。主軸はほぼ南北を指す。

### 第116号土坑出土遺物

#### 土器 (第47図20~22)

20は早期の沈線文土器で、貝殻文を地文とする。21・22は中期末~後期初頭の土器である。21は無文の胴部で縦位の研磨が徹底される。22は地文縄文上に沈線が垂下する。

### 第119号土坑 (第43図)

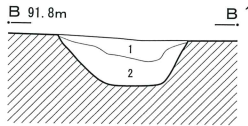
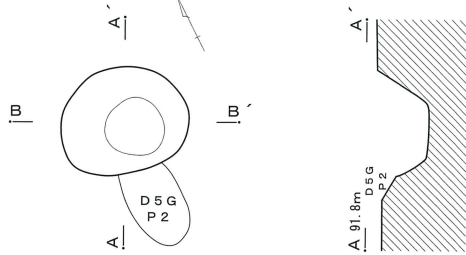
B-4グリッドに所在する。楕円形の土坑で、長径1.20m、短径1.04m、壁高0.09mを測る。主軸はN-72°-Eを指す。北壁際の床面上から底部を欠く深鉢1点が出土した。

### 第119号土坑出土遺物

#### 土器 (第46図3)

3は前期諸磯b式期の粗製土器である。縄文のみ施文される深鉢で、底部を欠失する。口縁は直線的に開いて頸部に括れを持ち、胴部中段の張り出すキャリパー形を呈する。地文はLR単節の縄文が横位回転で施文され、施文の末端に綾線文が観察される。最大径18.0cm・現存高13.8cmを測る。胎土に多

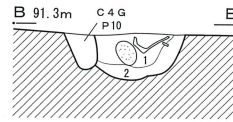
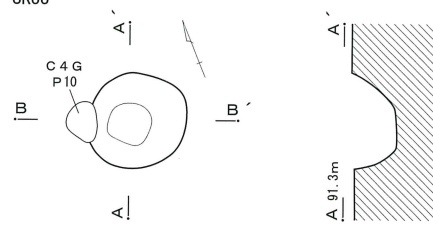
SK72



SK72

- 1 茶褐色土 ローム粒子主体 締まりややあり 粘性なし
- 2 茶褐色土 1層よりやや暗い 炭化物粒子・焼土粒子微量 くされ礫と多くの土器が出土している

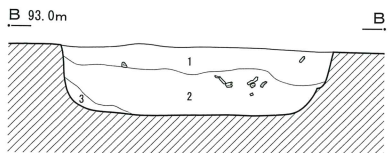
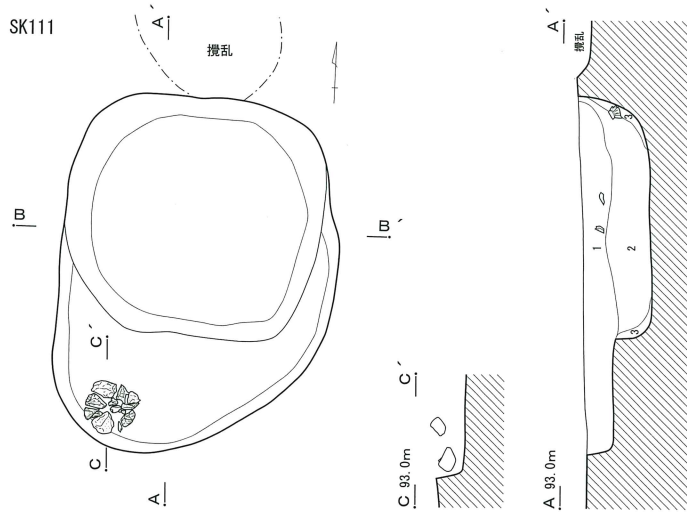
SK88



SK88

- 1 黒褐色土 黒色土と風化したロームブロックが混在している
- 2 明褐色土 1層と類似するがより多くのローム粒子を混入しているために色調が明るい

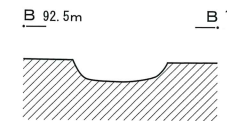
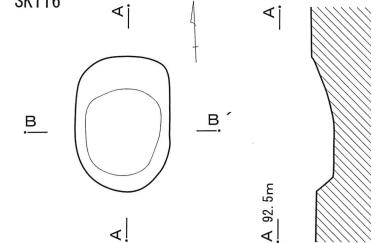
SK111



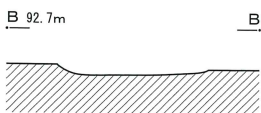
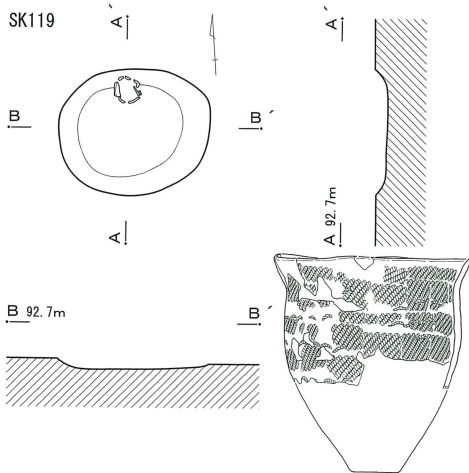
SK111

- 1 黄褐色土 ローム粒子と小ブロック主体 黒色土含む
- 2 黒褐色土 黒褐色土ブロック主体 ローム土・焼土粒子少量
- 3 明黒褐色土 ローム粒子多量 締まりは弱い
- ※ 遺物の出土状態から見て埋め戻しと思われる

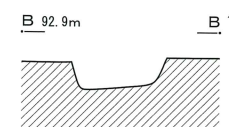
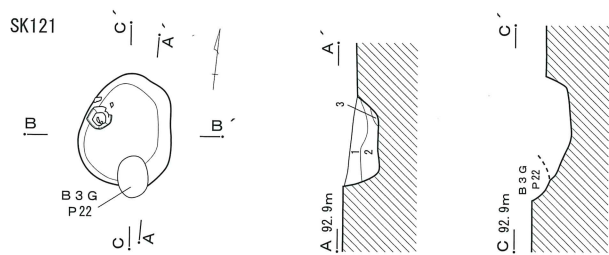
SK116



SK119



SK121



SK121

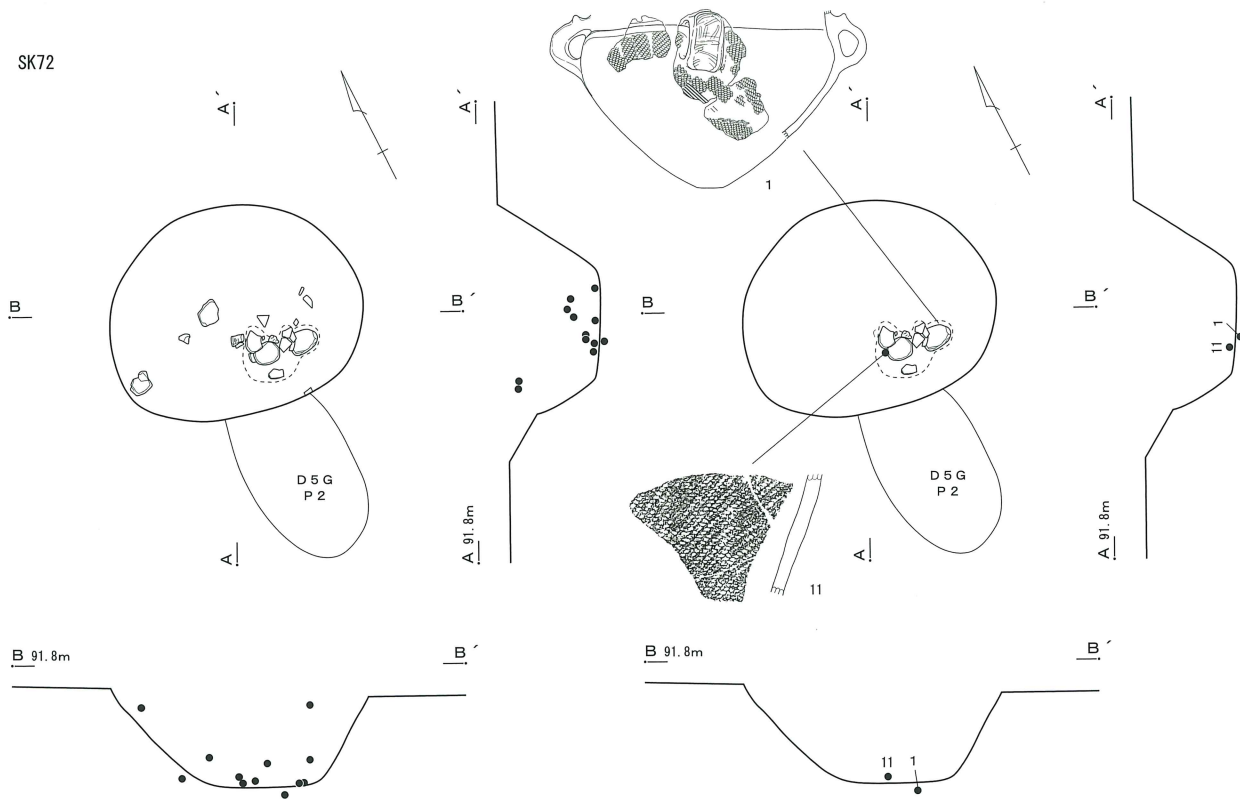
- 1 暗黒褐色土 ローム土と黒色土の混土层 風化したロームブロック含む
- 2 暗黒褐色土 1層よりローム土を多く含み明るい
- 3 暗黄褐色土 ローム土主体 締まりなし 壁崩落層

0 2m 1:60

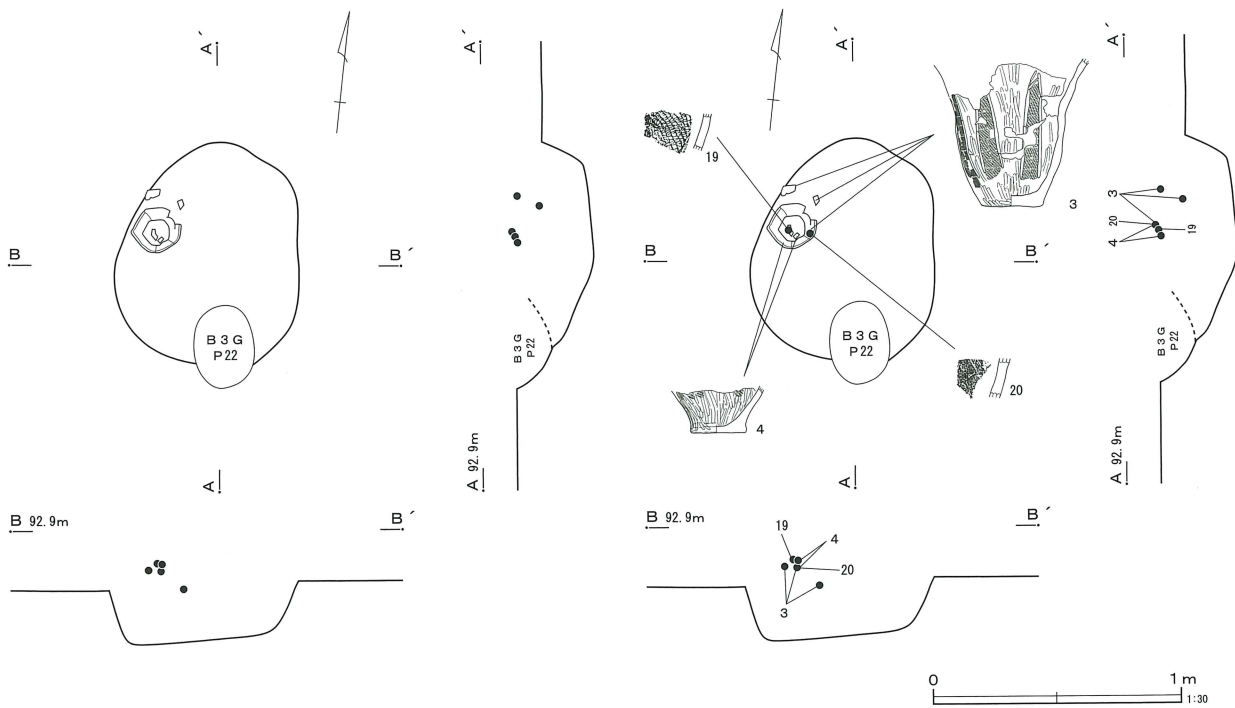
第43図 縄文時代の土坑



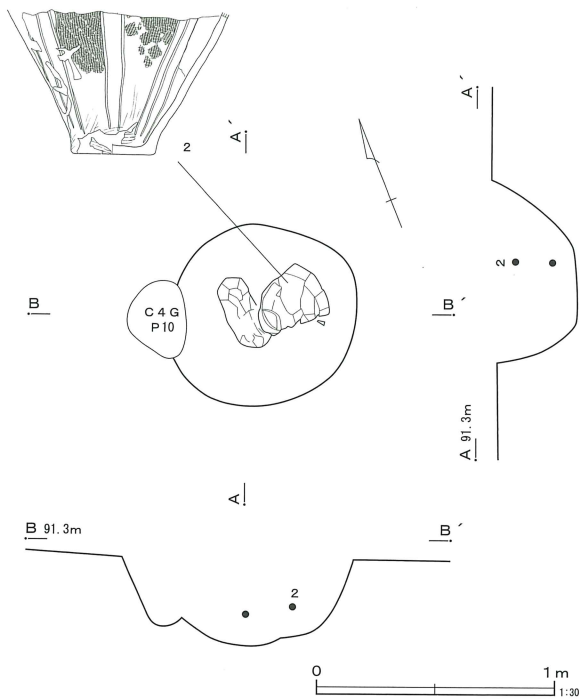
SK72



SK121



第44图 第72・121号土坑遺物出土状况



第45図 第88号土坑遺物出土状況

量のシルトを含み、器壁は多孔質で焼成はやや不良である。

第121号土坑 (第43・44図)

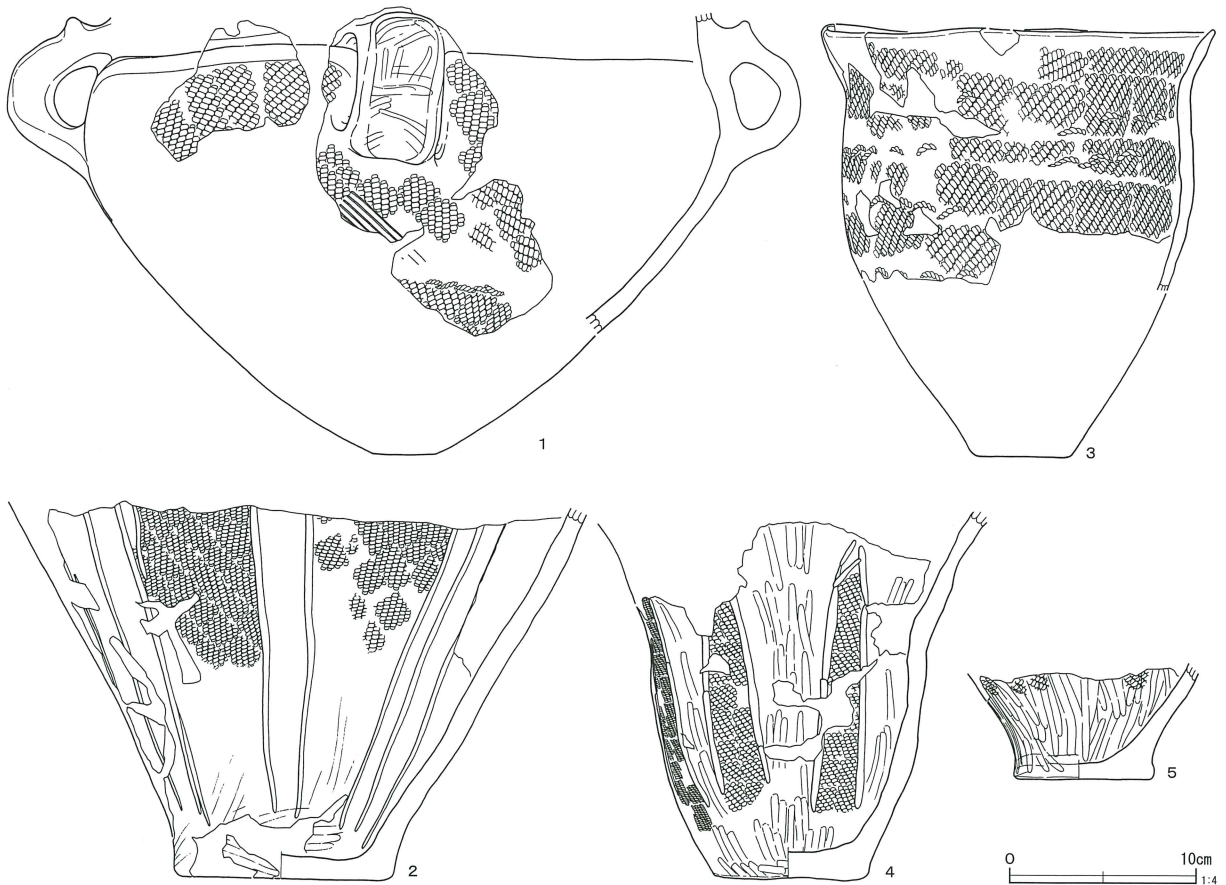
B-3グリッドに所在する。不整楕円形の土坑で、長径0.90m、短径0.76m、壁高0.12mを測る。主軸はN-14°-Eを指す。壁は直線的に立ち上がり、底面は中央に向かって傾斜する。

遺物は検出面付近の北西隅に集中している。とりわけ、第46図4とした小型深鉢が正位で出土したのが目を引く。

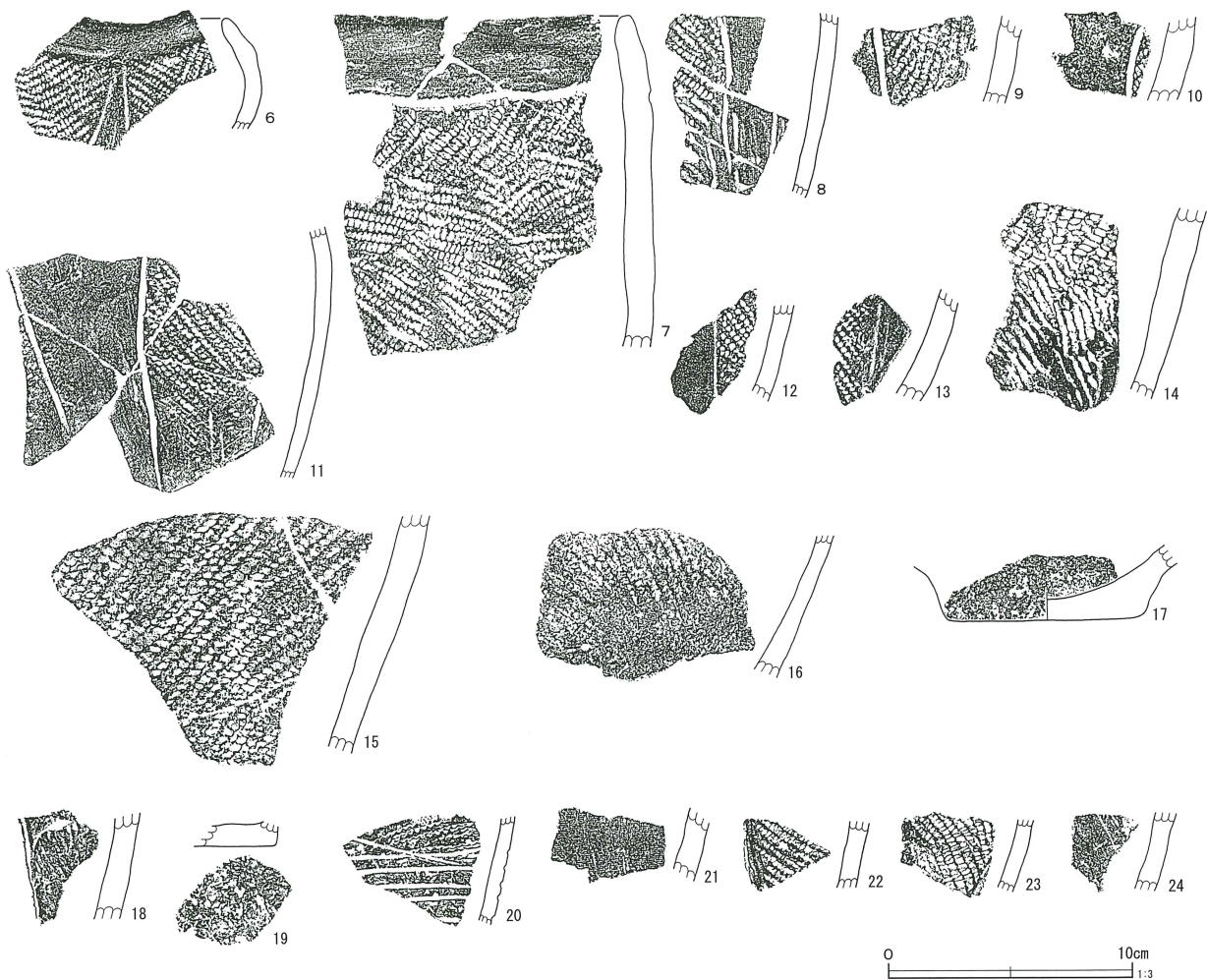
第121号土坑出土遺物

土器 (第46図4・5、第47図23・24)

4は小型精製深鉢で、胴部中段から底部にかけて残存する。胴下半部に逆V字状の区画が描かれ、下端開放される。区画内部にはLR単節の縄文が縦位回転で施文される。最大径19.7cm・現存高20.4cmを測る。



第46図 土坑出土遺物 (1)



第47図 土坑出土遺物 (2)

5は小型深鉢の底部である。胴下半部にLR単節縦位回転の縄文を施文した後、全面に縦位の研磨を施している。最大径12.4cm・現存高6.2cmを測る。

23は地文縄文上に沈線が垂下する。24は無文の胴部で縦位の研磨が徹底される。

#### 第111号土坑 (第43・48・49図)

B-3グリッドに所在する。上下2段の掘込みを持つ。上位のものを掘込み1、下位のものを掘込み2と仮称する。

掘込み1は不整な長楕円形を呈し、長軸3.00m、短軸2.28m、主軸方向はN-33°-Eを指す。壁高は0.22mを測る。掘込み2は隅丸方形を呈し、長軸2.02m、短軸1.94m、主軸方向はN-84°-Wを指す。検出面からの壁高は0.54mを測る。

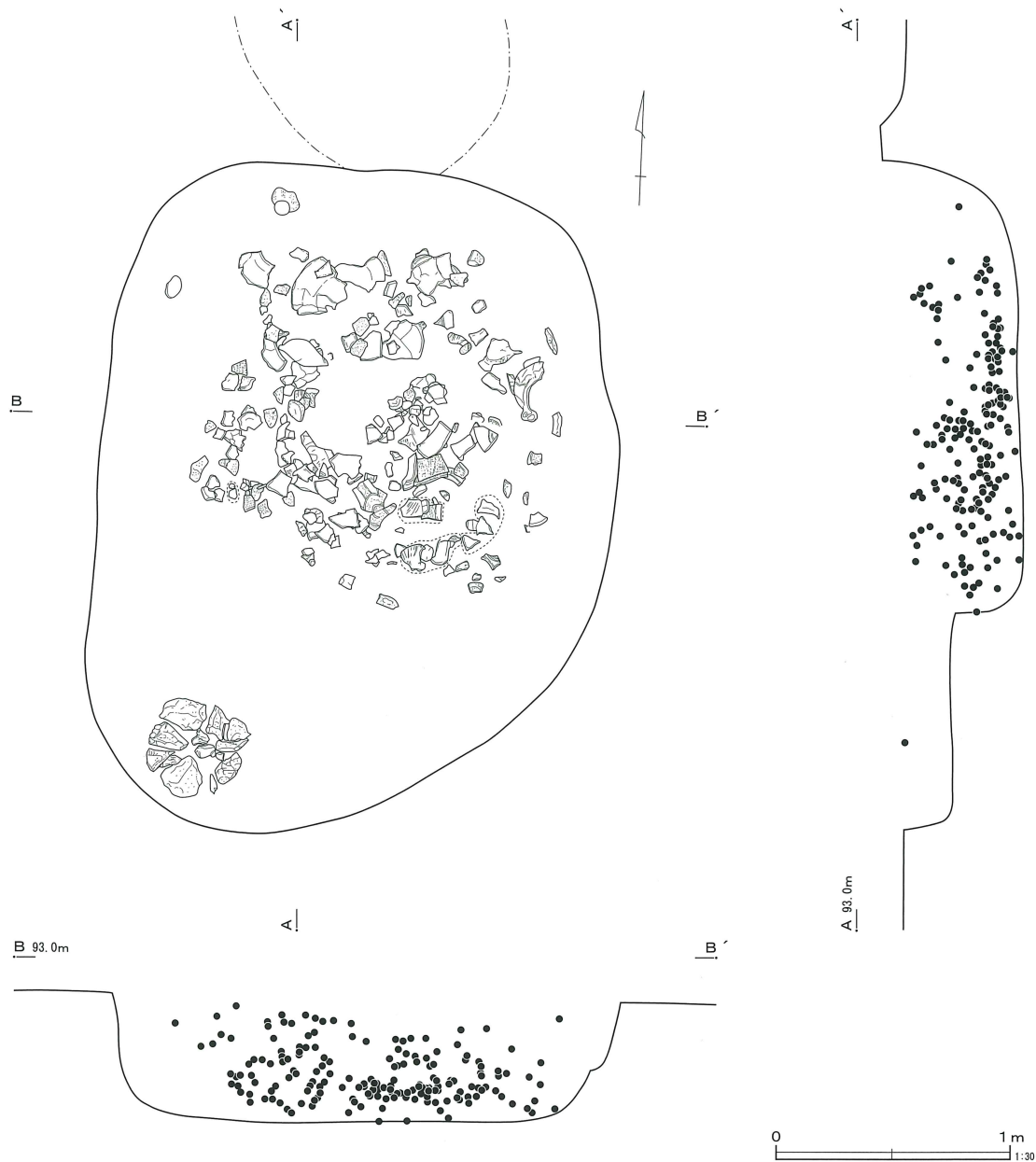
断面観察の結果から掘込み1が掘込み2を切っていることが判明した。断面図上の第1層が掘込み1の覆土に相当しており、掘込み1は掘込み2の平面プランをほぼ覆うかたちで、さらに南南西へと拡張されていることがわかる。

この拡張部分先端の覆土中には第43図にみられるように小配石を伴っていた。最大径45cmほどの小規模なもので、13点の角礫および亜角礫からなる。

遺物は大半が掘込み2の範囲から出土しており、覆土上層から底面までまんべんなく出土している。

しかし、第49図のように復元個体に絞って出土状況を試みると、1次堆積土からの出土は僅少であり、大半が壁から中央へと下がるレンズ状の土層中から出土していることがわかる。

平面的にみると、図化・非図化含めほとんどの遺



第48図 第111号土坑遺物出土状況 (1)

物が掘込み2の中央直径約1.2mの範囲に集中している。

本土坑からは14個体の復元土器が出土した。いずれも小型精製深鉢であり、寸胴の大型深鉢や両耳壺が破片レベルでしか出土していない等きわめて偏った組成をなしている点は注目される。

第111号土坑出土遺物  
土器 (第50~54図)

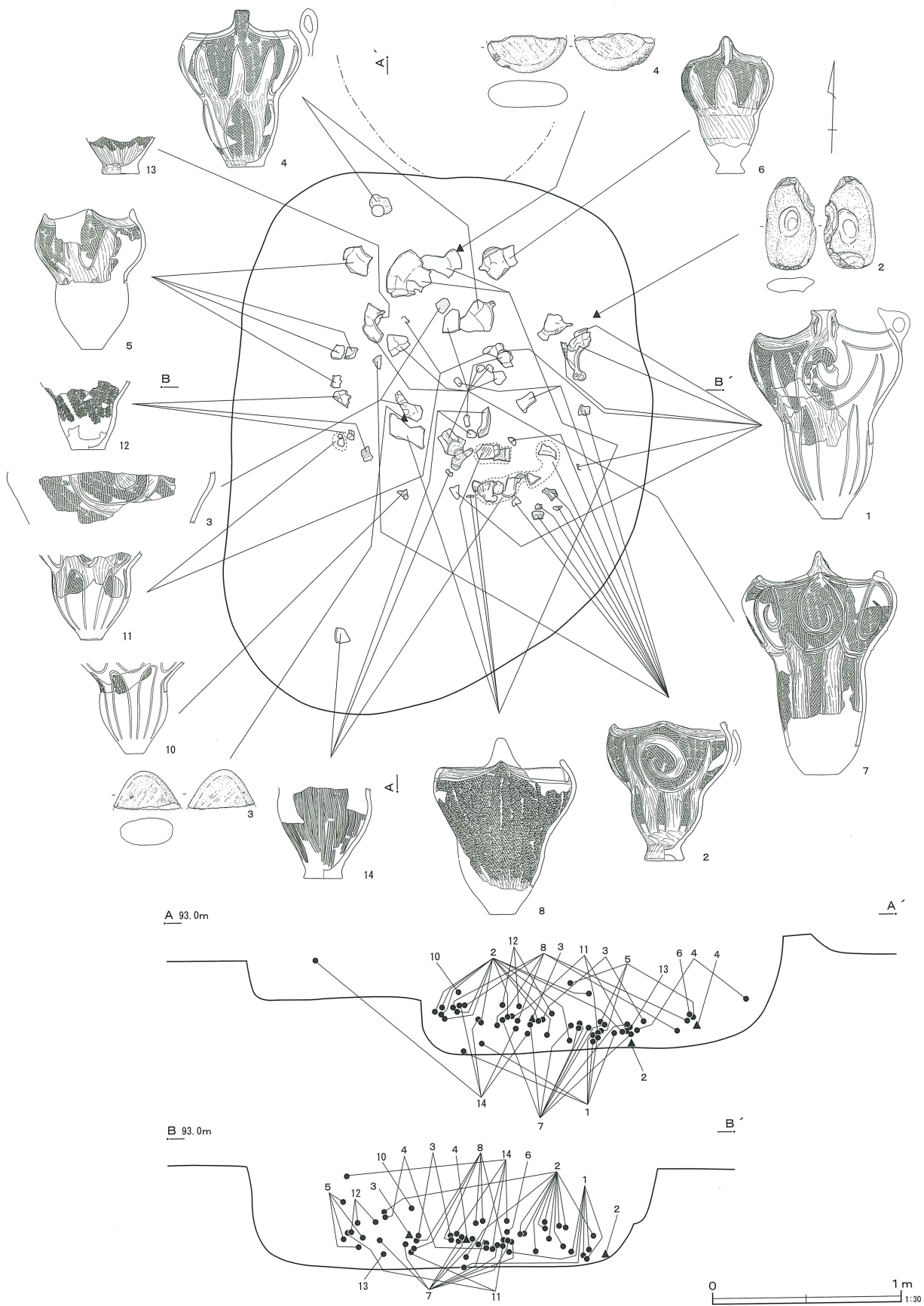
1~6は磨消縄文系の深鉢である。うち1~3はJ字文の土器である。

1は口縁から胴部中段までが残存する。緩やかな波状口縁をなし、1単位の橋梁状把手が付される。

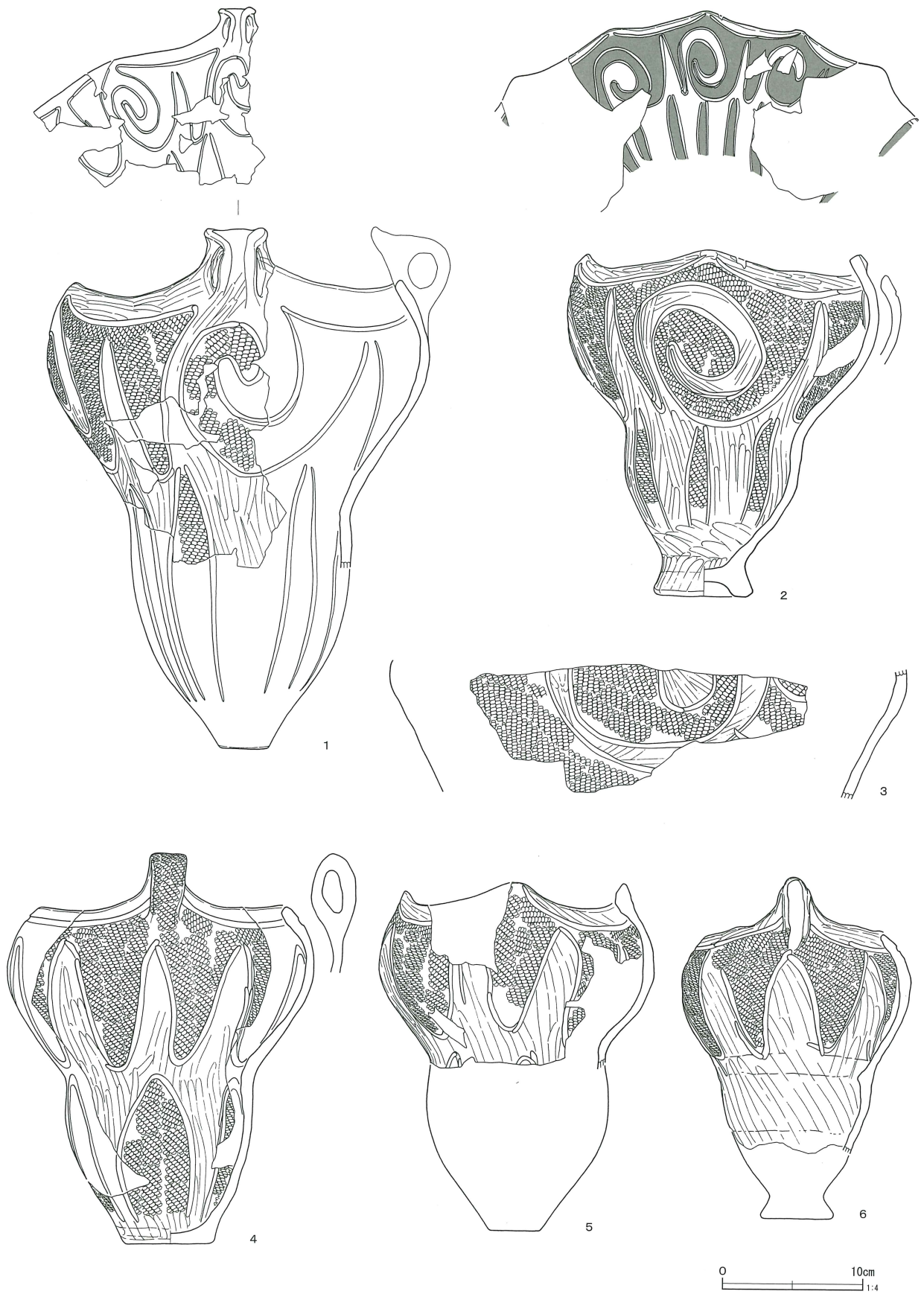
胴上半部の文様はJ字文と鋸歯文の反復であり、波頂部直下にJ字文が描かれ、波底部には鋸歯文が配される。J字文の上端は口縁部の無文帯と癒着する。胴下半部には逆V字の区画が描かれ、上端は胴部上半の文様帯に貫入し、下端は開放する。

地文はRL単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。最大径28.7cm・現存高23.9cmを測る。

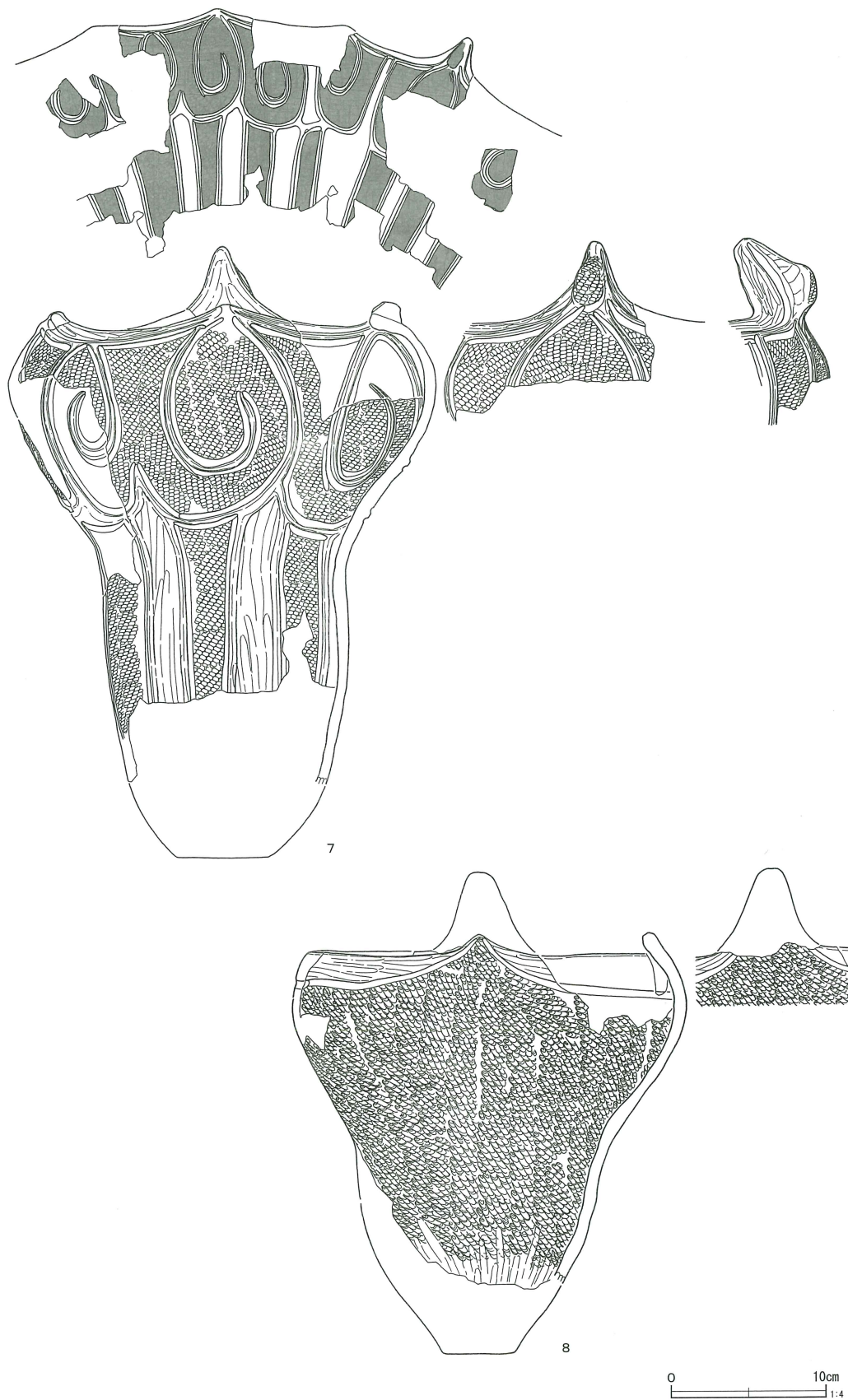
2は1よりやや小型の深鉢で、ほぼ全容を知りう



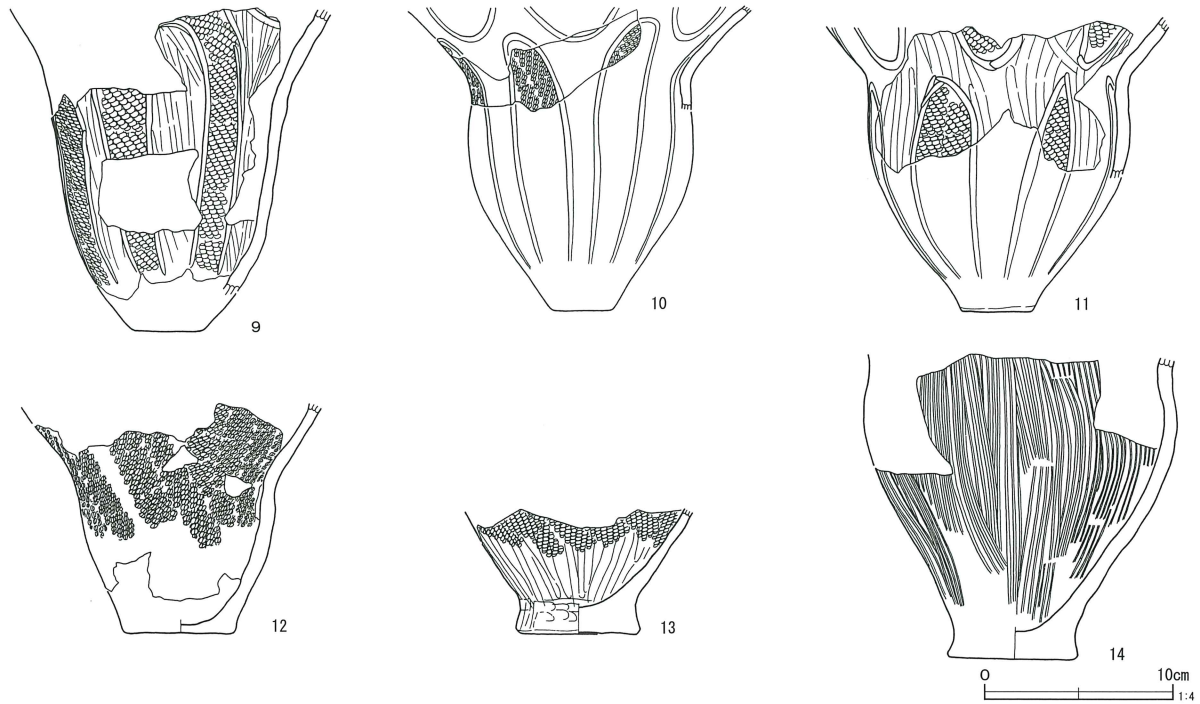
第49图 第111号土坑遺物出土狀況 (2)



第50图 第111号土坑出土遗物 (1)



第51图 第111号土坑出土遗物 (2)



第52図 第111号土坑出土遺物 (3)

る資料である。器形や文様構成等、きわめて1に類似するが、J字文上端が口縁部無文帯から独立している。底部は上げ底を呈し、小規模な脚台を形成している。地文はLR単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。最大径22.2cm・現存高24.5cmを測る。

3は胴部中段のみが残存する。磨消縄文によるJ字文の一部が観察されるが、主文様間を埋める鋸歯文が存在せず、1・2に比べ崩れた文様構成が見て取れる。地文はRL単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文される。最大径36.8cm・現存高9.0cmを測る。

4～6は磨消縄文により鋸歯状のモチーフを描く小型精製深鉢である。

4は口縁から底部までほぼ全容を知りうる資料である。緩やかな波状口縁をなし、波頂部に（おそらくは1単位の）橋梁状把手を配する。口縁直下に1条の沈線が巡り、口縁部無文帯を区画する。胴部中段の括れ部分で文様が上下に分帯される。上段は鋸歯文を描き、下段は下端開放する逆V字のモチーフが並ぶ。地文はLR単節の縄文で、縦位回転を基本に、

口縁の区画直下では横位回転で施文される。最大径21.9cm・現存高27.5cmを測る。

5は口縁から胴部中段まで残存する。器形や文様構成はほぼ5と共通する。口縁部無文帯を区画する沈線は、波状口縁の波頂部で口端に向けて開放し、縄文施文部が貫入している。最大径19.6cm・現存高13.0cmを測る。

6は4・5にくらべ口径が狭く、胴上半部が球胴状に張り出している。基本的に水平口縁の土器であるが、口端上に1単位の橋梁状把手を持つ。胴上半部に鋸歯状の磨消モチーフを描くが、胴下半部は無文である。最大径16.3cm・現存高19.5cmを測る。

7は両側になぞりを加えた隆帯によって大柄の渦巻文を描く土器で、いわゆる梶山類の深鉢である。口縁は緩やかな4単位の波状口縁をなし、1単位の鳥頭状突起を配する。口縁直下に1条の沈線が巡って幅狭の口縁部無文帯を構成するが、波頂部ではこの区画は途切れている。

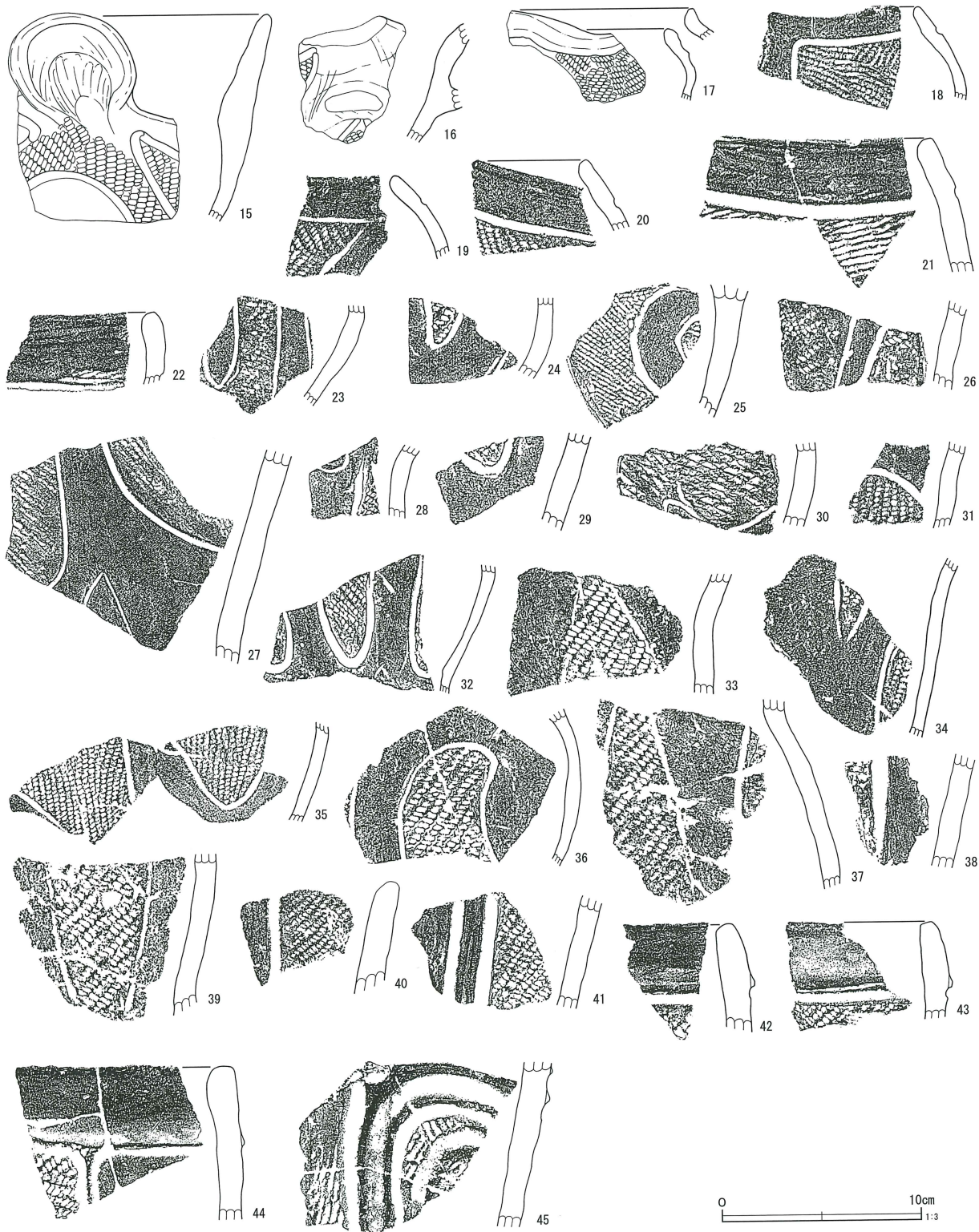
胴部中段に1本隆帯による波状の区画が巡り、文様を上下に分帯している。胴上半部は1本隆帯のJ字文で、上端が口縁部無文帯と癒着している。胴下



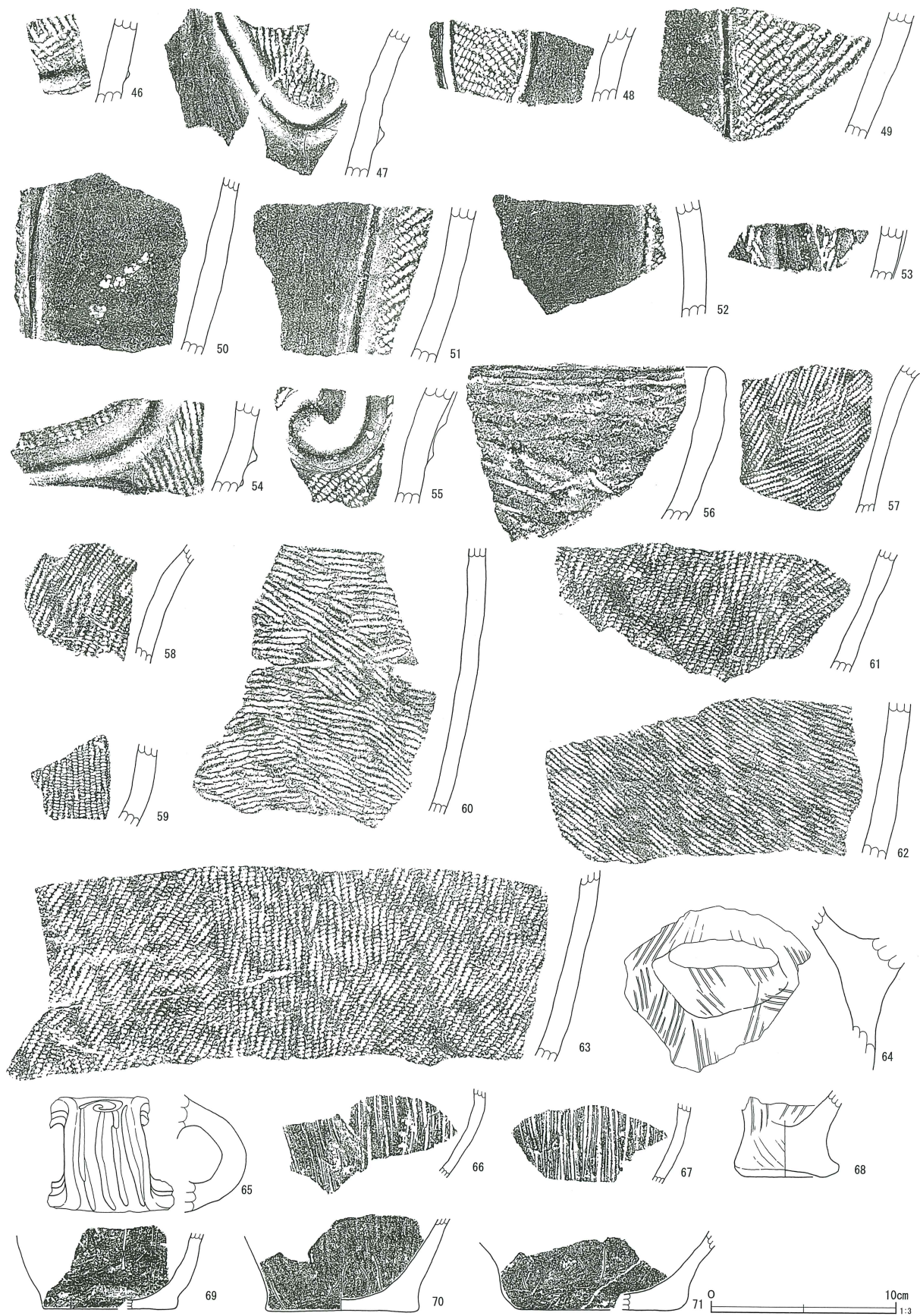
半部は両側を隆帯で区画した磨消懸垂文が垂下する。地文はRL単節の縄文で、基本的に縦位回転で施文される。最大径27.4cm・現存高34.5cmを測る。

8は縄文施文の深鉢で、口縁から胴下半部までが

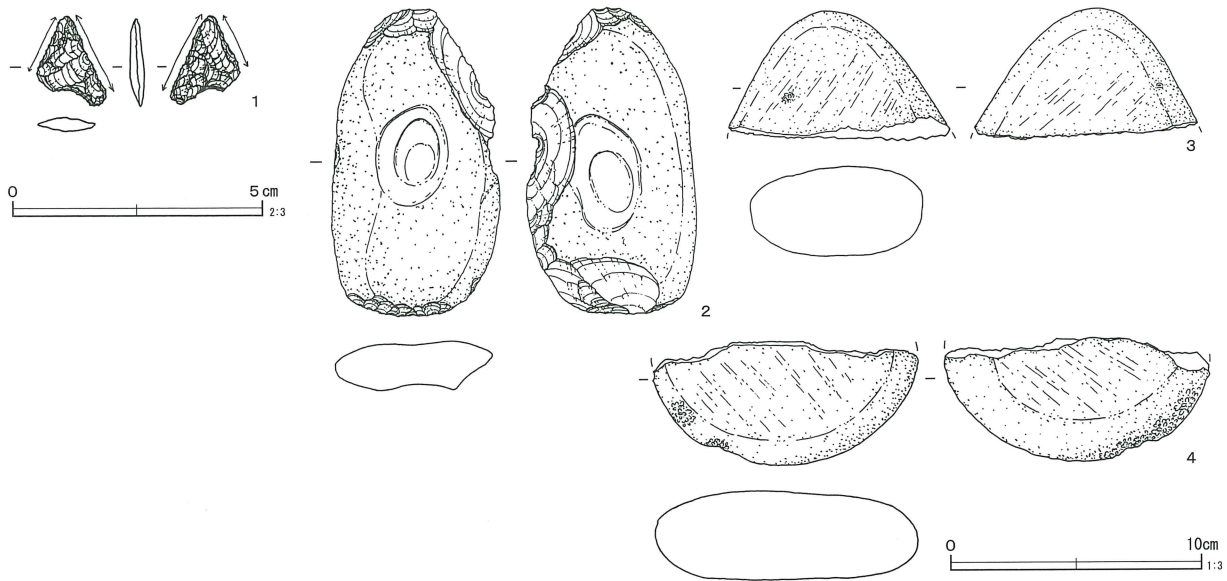
残存する。基本的に水平口縁の土器であるが、1箇所のみ山形の小突起を持つ。この突起と対向して1単位の大型突起が付されていたようだが、折損している。口縁下に1条の沈線が巡り、口縁部無文帯を



第53図 第111号土坑出土遺物 (4)



第54图 第111号土坑出土遺物 (5)



第55図 第111号土坑出土遺物 (6)

形成する。山形小突起部分ではこの区画は口端に向けて開放し、縄文施文部が貫入している。

地文はL無節の縄文で、縦位回転で施文されている。最大径25.3cm・現存高22.9cmを測る。

9は小型精製深鉢で、胴部中段から底部の直上までが残存する。胴下半部には逆U字状の磨消モチーフが描かれ、胴上半部には波状の区画が存在するようだ。地文はLR単節の縄文で、モチーフに沿って充填施文されている。最大径16.8cm・現存高15.5cmを測る。

10・11は1～5に類似の磨消モチーフを持つ小型精製深鉢である。

10は胴部中段のみ残存する。胴下半部に逆U字状の区画が描かれ、胴上半部にはJ地文または鋸歯文が描かれるものとみられる。地文はLRL複節の縄文である。最大径18.2cm・現存高5.3cmを測る。

11も胴部中段のみが残存する。文様構成は10とほぼ共通である。地文はLR単節の縄文である。最大径

18.2cm・現存高8.5cmを測る。

12は縄文のみ施文される小形深鉢である。胴部中段の括れ部分から底部にかけて残存する。地文はRLR複節の縄文で、括れの直下まで施文される。最大径14.8cm・現存高12.1cmを測る。

13は小型の深鉢で、胴下半部から底部にかけて残存する。底部の直上に括れを持ち、ごく軽微に内湾しつつ直線的に開いている。地文はRL単節の縄文で、右下がりに回転施文される。最大径12.0cm・現存高6.7cmを測る。

14は半粗製の深鉢で、胴部中段から底部にかけて残存する。櫛歯状工具による縦位の集合沈線のみ施文される。最大径16.8cm・現存高16.0cmを測る。

15以下に破片資料を一括した。15～41は沈線による磨消縄文を描く個体で、うち15～20は小型精製深鉢の口縁部である。

15は波状口縁深鉢で、波頂部に朝顔形の突起が付される。胴部には1の個体に類似の磨消文様が展開

第9表 第111号土坑出土遺物観察表 (第55図)

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	
2	凹石	緑泥片岩	12.1	6.7	2.2	248.0	
3	磨石	閃緑岩	5.2	8.8	3.5	205.3	
4	磨石	閃緑岩	4.9	10.5	3.5	255.4	

するが、ネガポジの関係に混乱がみられる。16もこれに類似の口縁部で、橋梁状の把手が付される。17も波状口縁であるが、口唇が強く内屈する。

18・19は水平口縁ないし緩い波状口縁をなすものとみられる。17に似た強い湾曲を示し、口縁部無文帯と胴部の磨消文様が癒着している。20は波状口縁で、口唇は直線的に内傾している。

21・22は胴張りの大型深鉢に伴う口縁とみられる。口縁部無文帯を持ち、これと胴部の縄文施文帯との間を1条の沈線によって区画している。

23～39は小型精製深鉢に伴う胴部である。23～28・36等は胴上半部に展開するJ字文の一部である。27・32は胴下半部に描かれた逆V字の区画上端が、胴上半部のモチーフの間隙に貫入している。

32・35・39は胴上半部の波状区画下端部である。34はV字の区画が上下に交錯しており、やはり胴部中段の破片である。33・34は逆V字の区画文で、胴下半部の破片である。

40・41は沈線による磨消懸垂文で、中期末葉に遡る可能性がある。

42～55は隆帯ないし微隆起線文を主体とする土器である。

42・43は口縁部無文帯下端を扁平な隆帯と1条の沈線により区画している。44は胴張りの大型深鉢に伴う口縁部である。口縁部無文帯下端を断面三角形の隆帯で区画し、胴部には幅広の磨消懸垂文が垂下する。

### (3) グリッド出土遺物

調査区全体を覆う遺物包含層および古墳・中・近世の遺構覆土中からは多量の縄文土器片が出土した。主体をなすのは集落の時期に伴う中期末葉～後期初頭の土器であったが、今回遺構が検出されなかった早期の土器もまとまった量が出土した。

#### 旧石器時代の遺物 (第61図1)

ナイフ形石器が1点のみ出土している。細かな交互剥離による基部加工がみられ、石材は黒曜石を使

45・46・53～55は梶山類と呼ばれる胴部渦巻文の土器である。1本ないし2本の隆帯による大柄の渦巻文が描かれ、余白となる縄文施文帯もいくつかの小区画へと分割される。47・48は1等に類似のJ字文・波状文が微隆起線によって構成されるものである。49～52は44と同種の大型深鉢胴部で、幅広の磨消懸垂文が観察される。

56は無文の口縁部である。緩いキャリパー形をなす粗製的な深鉢と考えられ、篋状工具による粗雑な横位の撫で調整が全面にみられる。

57～63は縄文のみ施文される胴部破片である。地文はいずれも単節縄文で、LR・RL両方が存在する。

64・65は両耳壺である。64は橋梁把手の付け根部分である。櫛歯状工具による集合沈線文を地文とし、胴上半部の区画文は持たない。65は背面と側面に沈線文を伴う橋梁把手で、唐草文系の土器に伴う両耳壺であろう。

66～68は櫛歯状工具の集合沈線を地文とする小型の深鉢である。66・67は胴下半部、68は台付き風となる底部である。69～71は無文の底部である。

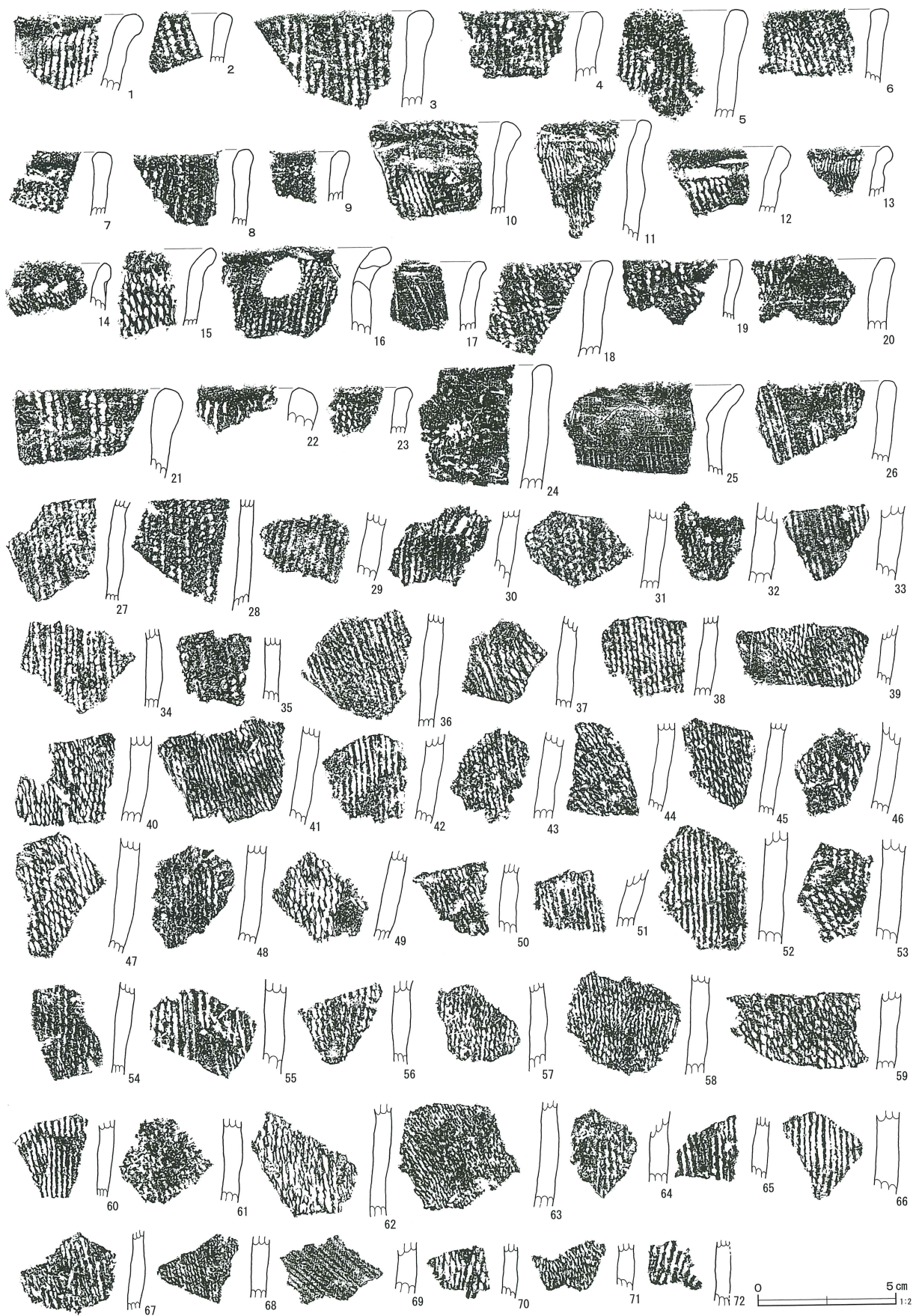
#### 石器 (第55図)

1は凹基の石鏃で、一方の逆刺部分を欠失している。2は扁平な自然礫の3辺を粗く刃部加工した礫器を凹石として転用したもので、両面とも使用している。3・4は磨石で、いずれも両面使用されている。4は敲石としても使用されている。

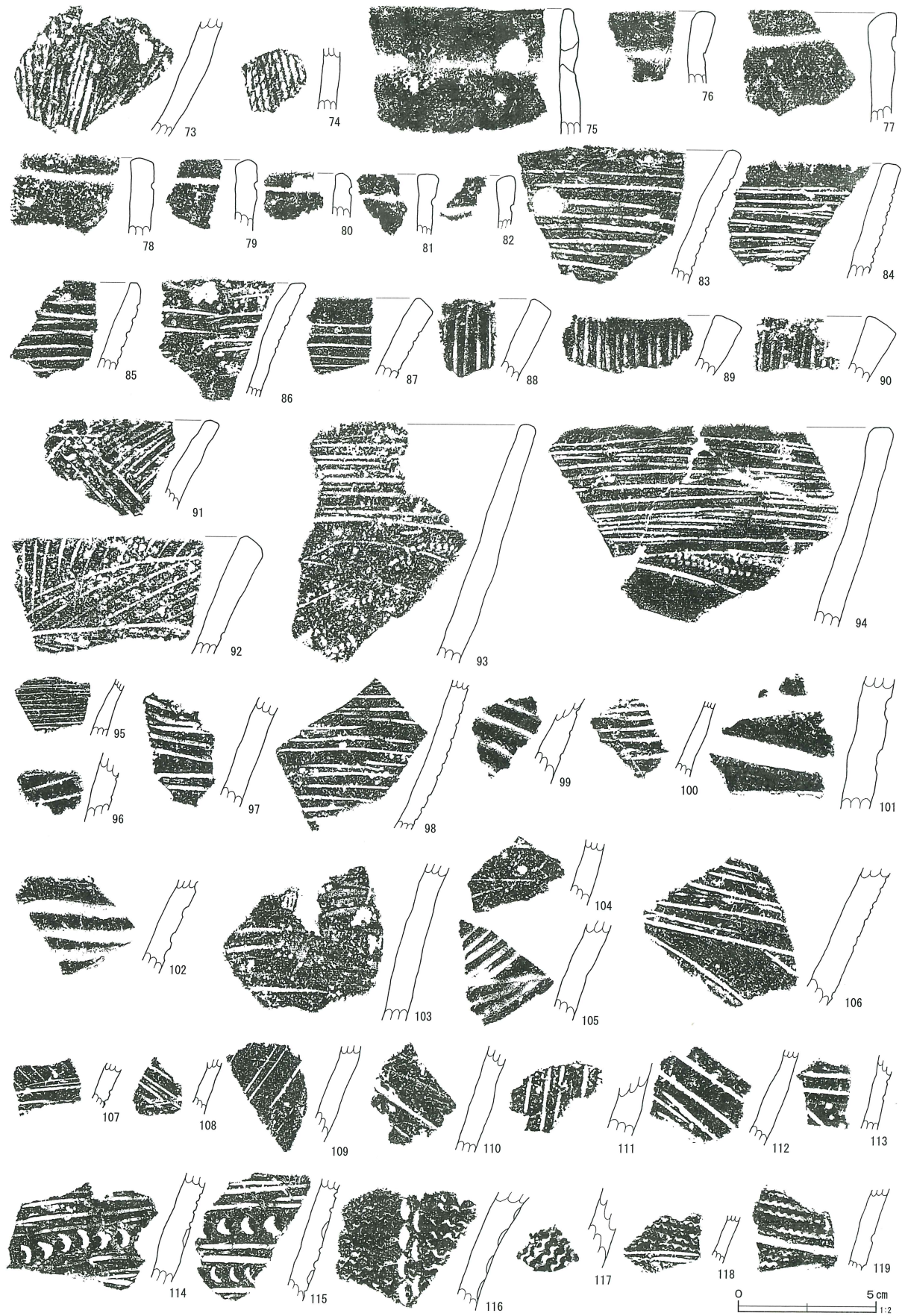
用する。

#### 縄文土器 (第56～60図)

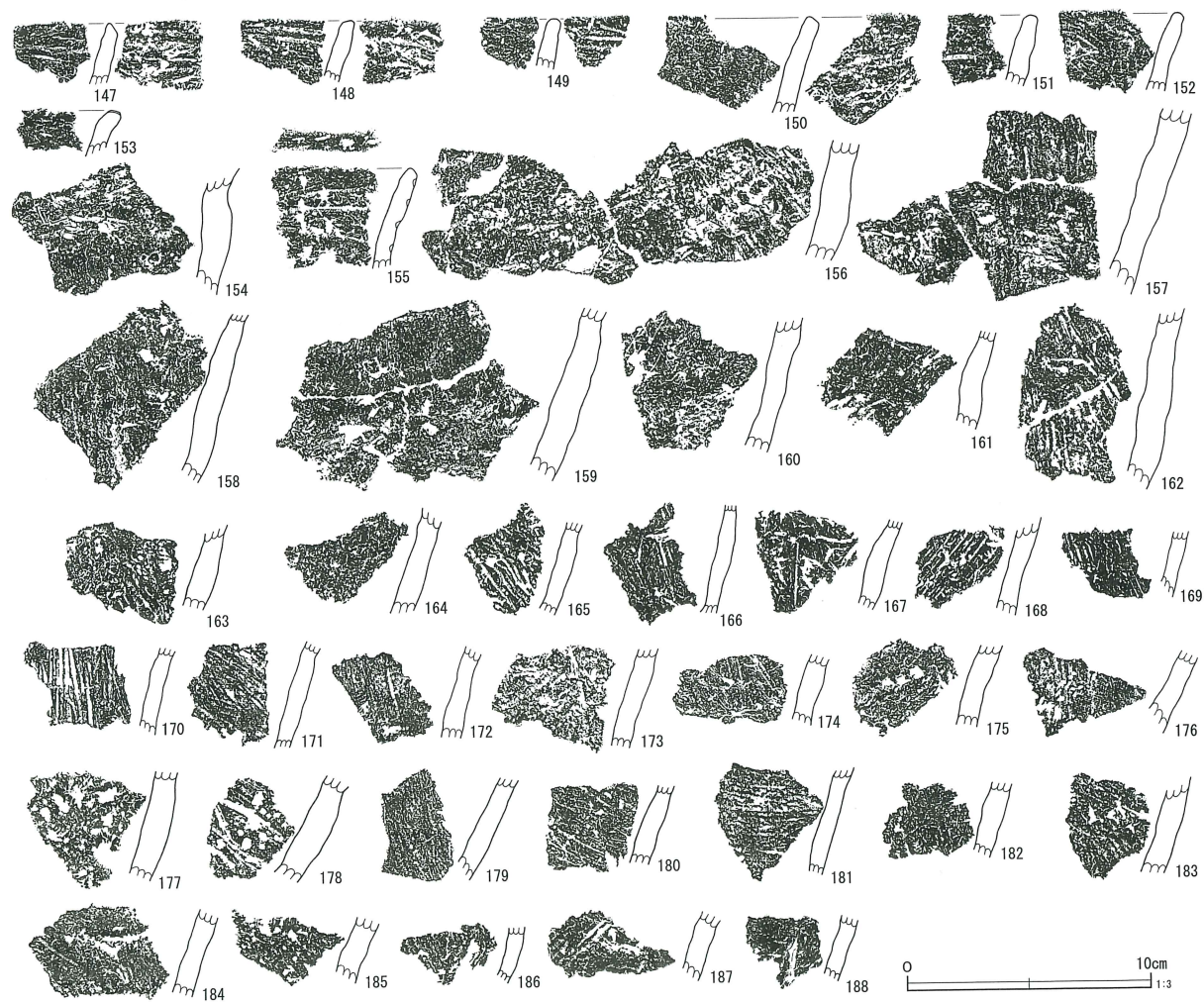
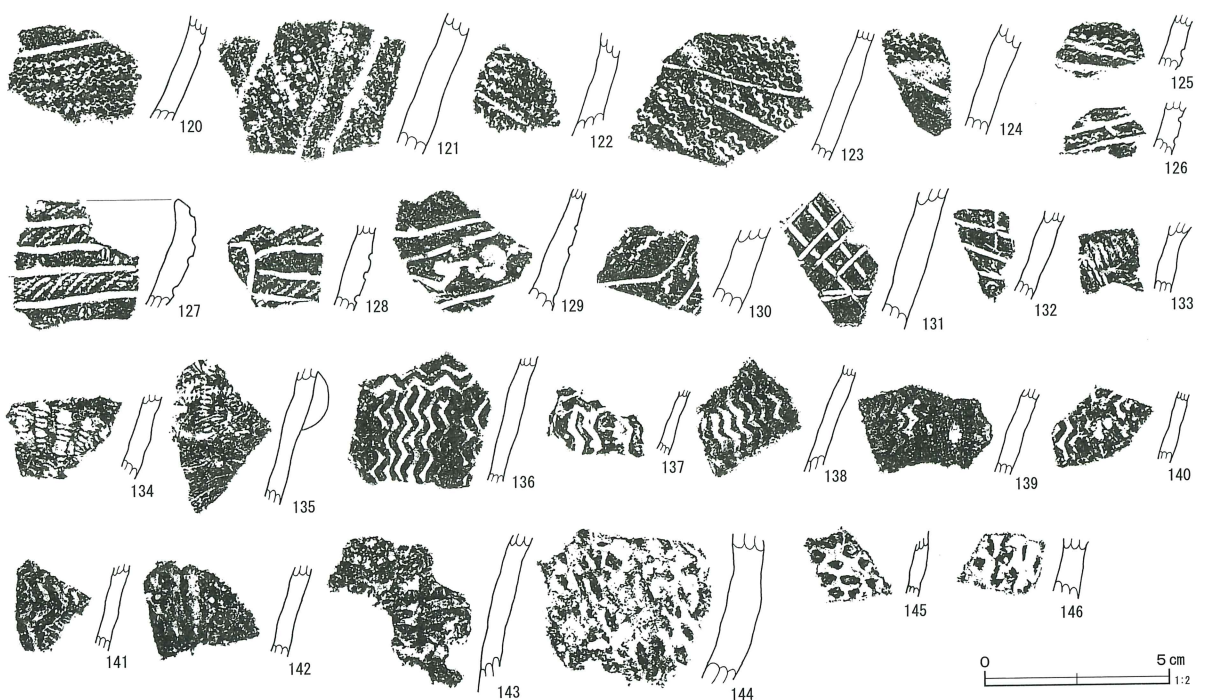
1～74は早期の撚糸文系土器群である。夏島式を中心に、稲荷台式段階のものが若干含まれるものと思われる。地文は、原体が判明したものについては縄文でRL、撚糸文でRがほとんどであり、66の胴部にLの撚糸が施文されているのが掲載遺物中唯一の例外である。



第56図 グリッド出土遺物 (1)



第57図 グリッド出土遺物 (2)



第58図 グリッド出土遺物 (3)

1～21は深鉢口縁部である。口唇は軽微に肥厚して外反する。1・10・11・13・15・16・21などは口縁やや強く外屈する。口縁と頸部で施文方向を変えるものもみられなかった。

1～9は縄文施文の個体である。1は口端上にも同一原体による縄文が施文されている。10～26は撚糸文が施文される。10・11は口端上にも同一原体の撚糸文が施文されている。12・13は頸部に絡条体の横帯圧痕がみられる。14は絡条体の先端を斜めに押捺した圧痕が巡っている。25は折り返し風の口縁で、内面に段を有している。12・15・18・19・21は粗大な撚糸文で、21では間隔を置いて施文される。27は頸部の破片である。

28～74は胴部破片で、内28～35は縄文、36以下は撚糸文が施文される。73は絡条体による擦痕で、原体不明である。

75～82は撚糸文系土器終末からこれに後続する無文土器である。75・76は頸部に段を持って、口縁肥厚し、頸部が段をなして「く」の字に外反する稲荷原式新段階。77～82は口縁直行で直下に1条の沈線が巡る東山式である。

83～132は沈線文土器群で、田戸下層式を主体とする。83～94は口縁部である。83～90は横位の、88～90は縦位の集合沈線文である。91・92は斜方向の集合沈線文が交錯し、下端を横位の沈線で区画している。93は地文として貝殻腹縁圧痕文が施文される。

95～132は胴部破片である。95～103は横位、104～112は斜位の集合沈線がみられる。101・102はひときわ太い沈線が用いられている。

113は横位と斜位の沈線で形成された区画内部に円形刺突文が充填されている。114・115は平行沈線間に横位の爪形文列が巡る。116は縦位の爪形文列が垂下し、左右に貝殻文が施文される。117～126は沈線文とともに貝殻文の施文される破片である。

127・128は平行沈線間に貝殻文が施文される磨消貝殻文である。127は口縁、128は胴部である。129は平行沈線間に波状沈線文が施文される。130は平行沈

線により菱形の区画が描かれ、内部に貝殻文が充填される。131・132は斜格子文である。

133～135は横位の絡条体圧痕文を施文する子母口式で、いずれも胴部の破片である。135は円形の貼瘤を十文字に刻むように絡条体を押捺している。

136～146は押型文土器である。136～141は山形文で、撚糸文系土器の終末から無文土器に伴うものである。136・137は横位の押型文を巡らせた下に、縦位の押型文を間隔を置いて帯状施文している。

142～146は楕円形押型文で、沈線文土器に伴うものと考えられる。144・146は比較的厚手の器壁に斜位の押型文が粗く施文されている。片岩などの小礫を混入した粗悪な胎土で焼成は不良である。

147～213は早期末葉の条痕文土器である。胎土に繊維を含み、表裏ないし裏面のみに貝殻条痕文が施文される。施文は全体に粗雑で、工具や施文単位が判然としない擦痕状のものも多い。147～153・155は口縁部である。大半が横位の条痕・擦痕のみの破片で、155が唯一文様を持っている。幅の狭い篋状工具先端による刺突が2列垂下するもので、口端上にも同一工具の刺突が巡っている。

214・215は前期初頭の花積下層式である。214は口縁部である。口唇が「く」の字に外反して、口端に刻みを持つ。口縁直下には撚糸の側面圧痕文が横走する。215は胴部で、RL単節の縄文を、回転方向を変えることで羽状縄文を構成している。

216～220は諸磯b式で、中段階の浮線文土器である。いずれもRL単節の縄文を地文として、浮線上にも同一原体の縄文を施文している。216はキャリパー形深鉢で、波状口縁の波頂部が双頭状に割れて縦扁平の小突起が付されている。218は口端上に棒状工具による刻みが巡る。

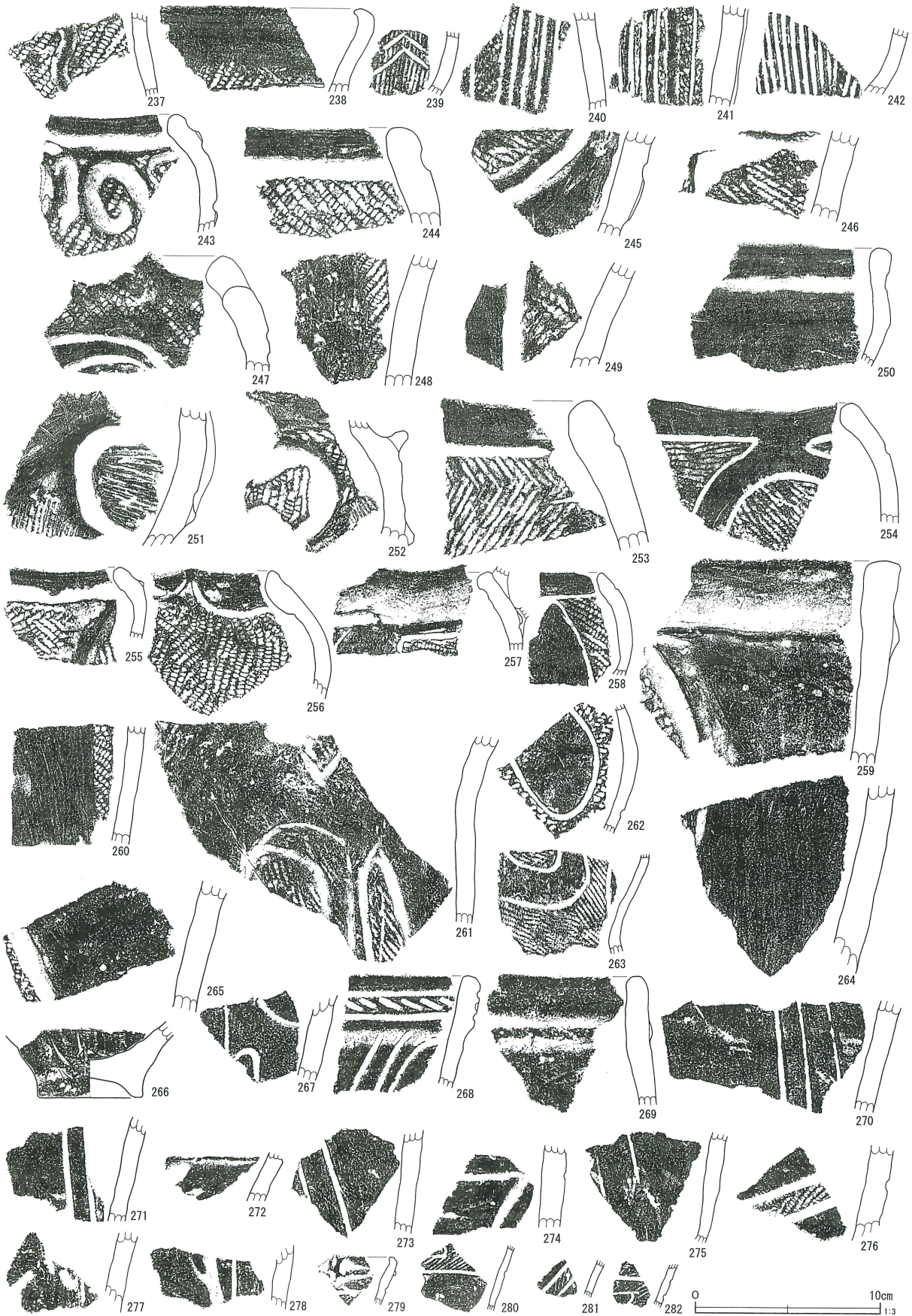
221・222は浮島・興津系の土器で、いずれも口縁部である。半截竹管による平行沈線上に、同一工具をロッキングさせた陰刻文が施文されている。

223～230は加曾利E I式である。223～226は口縁部で、2本隆帯の横S字文がみられる。223はRL単節





第59図 グリッド出土遺物 (4)



第60図 グリッド出土遺物 (5)

縦位回転、225は同横位回転の縄文を地文とする。

227はキャリパー形深鉢の頸部で、半截竹管による斜位の集合沈線を地文として、2本隆帯によるクラシクないし横S字文が描かれる北関東系の土器である。

228は胴部文様帯と頸部無文帯を隔てる隆帯区画で、縦長の突起が配される。229・230は鉢で、胴部中段が「く」の字に張り出して胴上半部に文様帯を持ち、刻みを伴う隆帯で器面を区画した内外に集合沈線による同心円文が描かれる。

231は加曾利E II式である。2本隆帯の弧線文の接続部に渦巻文が配される。地文はRL単節横位回転の縄文である。

232～237は胴部で、加曾利E I式ないしII式に伴うものであろう。地文縄文上に平行沈線による各種の懸垂文が描かれる。232は弧線文から分離する渦巻文が観察される。233以下は懸垂文で、234は左右に肋骨文が展開する。236・237は半截竹管の平行沈線による蛇行懸垂文である。地文は大半がRL単節の縄文で、縦位回転で施文される。

238は緩いキャリパー形の小型深鉢で、胴部に縄文のみが施文され、口縁下に無文帯を持つ。地文はRL単節縦位回転の縄文である。239は連弧文土器で、撚糸文を地文とする。

240は地文縄文上に縦位の集合沈線文が施文される。241は隆帯と集合沈線文が併用されている。242は曾利系の土器で、半截竹管による縦位の集合沈線を地文とする。

243～252は加曾利E III式である。243・244はキャリパー系深鉢の口縁部で、前者は渦巻文がみられる。245は楕円形区画の下端をなす隆帯で、頸部に無文帯を持つものとみられる。

247は口縁部文様帯を失った吉井城山タイプの土器で、口縁上に突起を持っていたものとみられる。250は無文の浅鉢口縁部で、胴上半部に最大径を持ち、口端は肥厚して外屈する。251・252は両耳壺の胴上半部で、キャリパー系深鉢の口縁部文様帯に由

来する楕円文がみられる。251は櫛歯状工具による条線を地文としている。

253～266は後期初頭段階における加曾利E系の土器である。253～258はキャリパー形の深鉢である。口縁部は無文化して文様帯を持たず、1条の沈線ないし微隆起線を巡らせて胴部との境を区画する。254は口縁部無文帯と癒着した玉抱き文が描かれる。

256は山形波状口縁の波頂部で口縁下の区画線が口端へと貫入する。257は微隆起線の土器で、口縁上に橋梁状の把手を付する。258は胴上半部に鋸歯文が展開する。259は寸胴の深鉢である。口縁下に1条の微隆起線が巡り、胴部には磨消縄文による逆U字のモチーフが描かれるものとみられる。269も同種の深鉢口縁部であろう。

260～265は胴部破片である。260は微隆起線で、264・265は沈線によって幅広の磨消懸垂文が描かれる土器で、259類似の大型寸胴の深鉢であろう。261はキャリパー形深鉢の胴部中段で、楕円形の区画が上下に対向する。262・263は小型精製深鉢の胴上半部で、磨消縄文によるJ字モチーフの一部である。

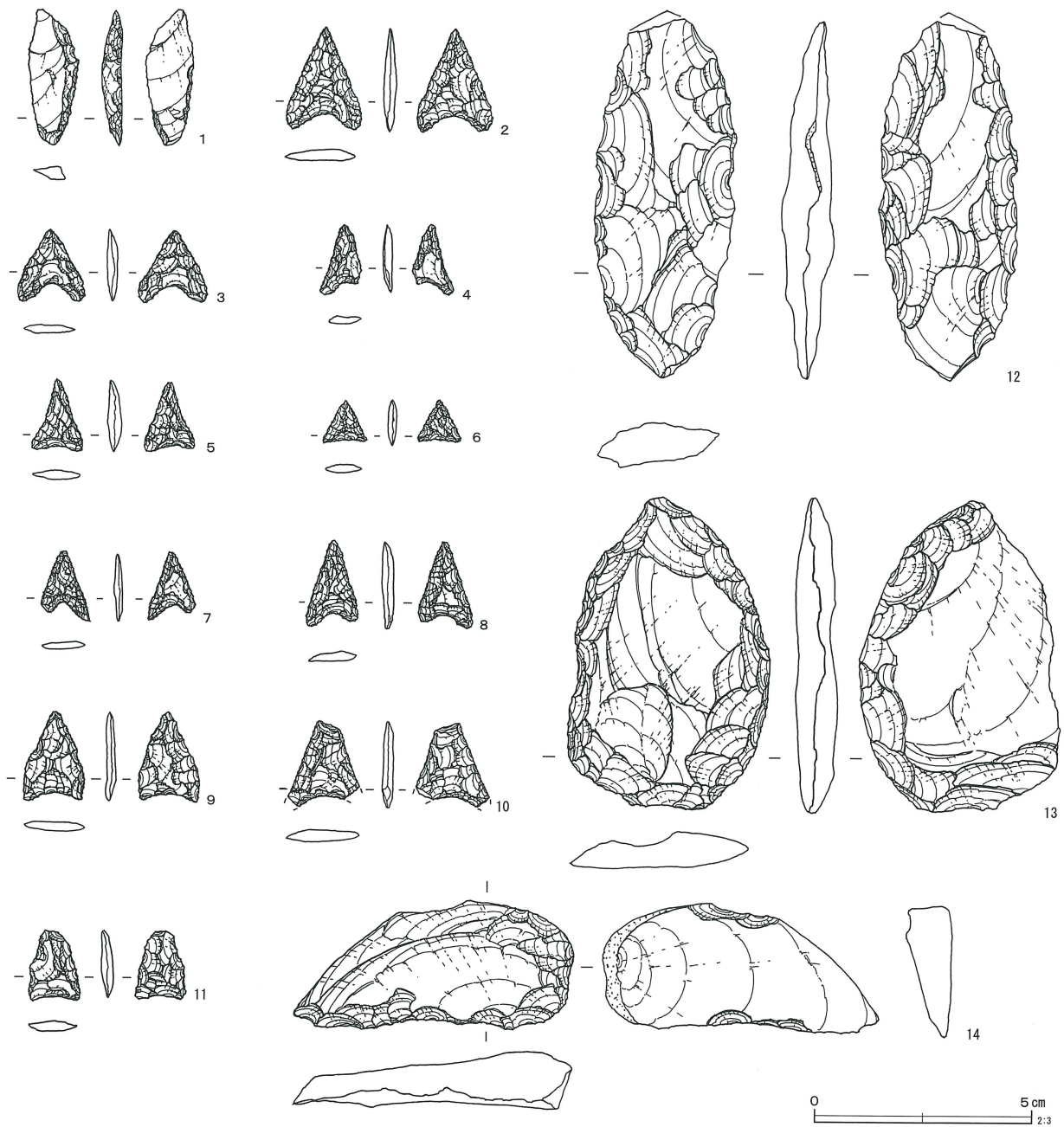
266は上げ底の底部で、小型精製深鉢に伴うものである。外面には縦位の研磨調整が観察される。

267は称名寺II式である。268・270～278は堀之内I式である。268は口縁部の破片で、口縁下に平行沈線を巡らせて内部に斜位の列点文を充填し、頸部に段を有する。胴部には三本沈線による曲線的なモチーフが展開している。270～278は3本ないし2本沈線で直線的な文様を描く胴部で、276は磨消縄文が用いられる。

279は堀之内2式で、いずれも朝顔形の小型精製深鉢である。279は口縁部で、口縁直下に刻みを伴う隆帯が巡り、「8」の字形の貼付文が付される。280～282は胴上半部の文様帯で、280・282は横楕円の区画、281は三角形のパネル状区画文が描かれる。

#### 縄文時代の石器（第61～65図）

2～11は石鏃である。平基の6以外はすべて凹基無茎の石鏃である。4・7は逆刺の一端を欠失する



第61図 グリッド出土遺物 (6)

が、これは製作過程で生じた可能性がある。

いずれも腹面に広く主要剥離面を残す。10は完形で3cmを超える大型の石鏃であったと思われるが、先端および両方の逆刺を欠損している。9は逆刺が小さく、両側縁が丸く張り出す特徴的な形態である。

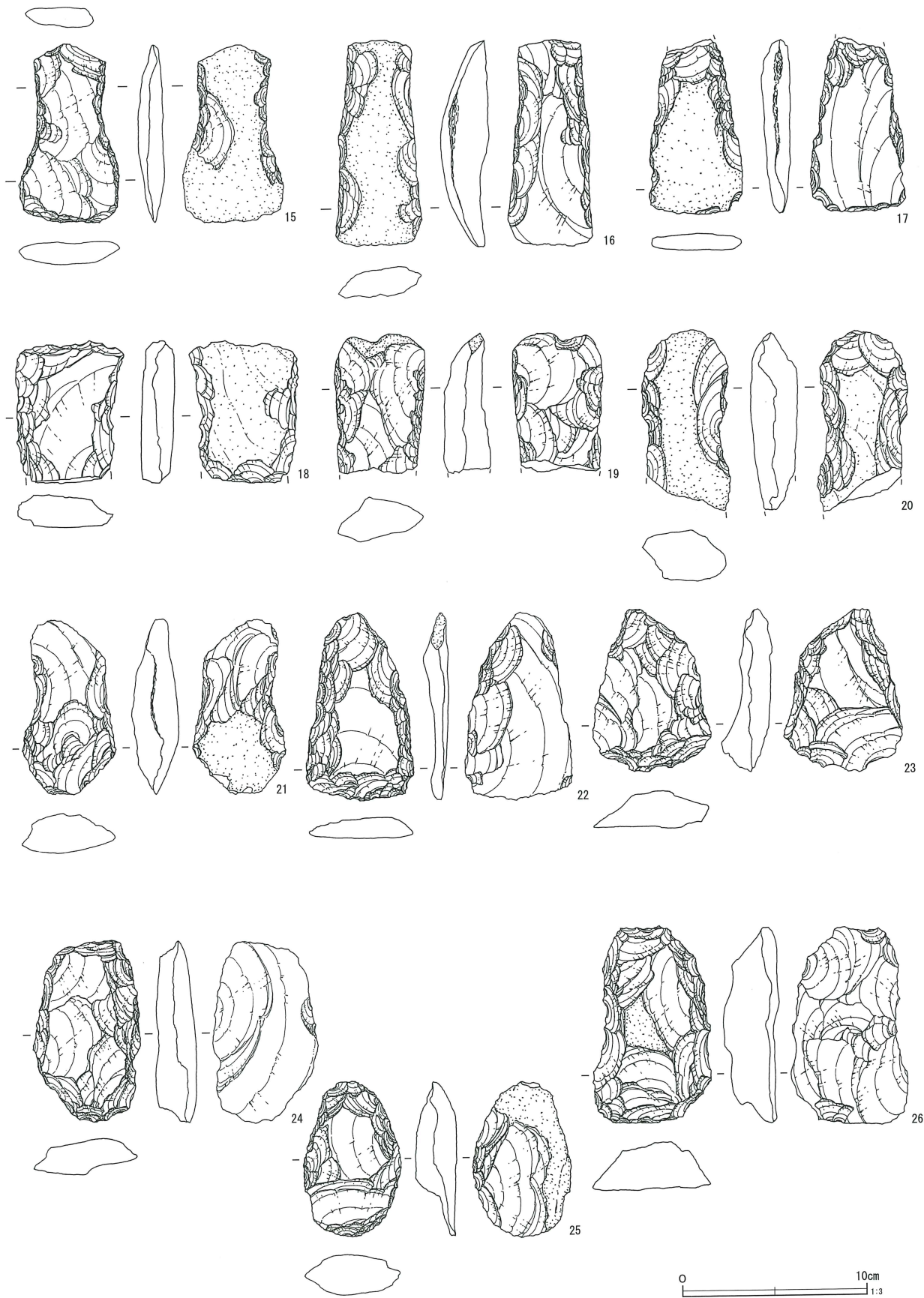
11は未製品と考えた。先端が丸みを帯び、基部がわずかに内湾する。側縁および先端部の加工は最小限に止められているが、このままの状態で使用に供し

た可能性もある。

石材はほとんどが白色～青灰色のチャートを使用する。2はホルンフェルス、8は黒曜石を使用する。

12は柳葉形の尖頭器である。先端部を欠失する。両側縁に表裏からの調整剥離がみられるが、基部はほぼ成形時の状態のまま残されている。石材はホルンフェルスを使用する。

13はスクレイパーと考えた。背面に主要剥離面を



第62図 グリッド出土遺物 (7)

残し、水滴形の両側縁に刃部加工を施す。左側縁は両刃だが、右側縁は片刃である。上方尖端部の加工が甘く、鈍角である点から尖頭器ではなくスクレイパーと考えた。頁岩を使用する。

14はスクレイパーである。縦長剥片の一侧縁を刃部加工している。打点側の側縁には自然面を残し、表面に細かな剥離を施して丸味を持たせ、握りとしている。黒色頁岩を使用する。

15～26は打製石斧である。15は撥形、16～20は短冊形であるが、21～26のような不定形のものが多いと出土している点に特徴がみられる。これら不定形の個体の多くが折損品の再加工によるものと考えられる。

15は腹面に自然面を残している。両面からの剥離によって挟り部が形成され、潰しが施される。刃部は片面のみの細かな剥離によって造り出されている。16は典型的な短冊形で、四隅の張った長方形を呈する。背面に自然面を残し、刃先の下がった強い湾曲を持つ。側縁に入念な潰しが観察される。17も背面に自然面を残すが、基部に両面からの入念な加工が観察される。やや寸詰まりのプロポーションから、基部を折損した後の再加工とも考えられる。18は基部のみ残存するが、20cmを超える大型の個体であったと推測される。腹面に自然面を残すが、折損後に刃部方向からの剥離が加えられており、再加工が開始された段階を示すものと考えられる。

18も基部のみ残存する。基部背面側に自然面が残る。断面紡錘形を呈し、側縁に潰しが施される。20は刃部欠損する。背面に自然面を、腹面に主要剥離面をそれぞれ残す。

21は刃部腹面に自然面を残して背面に剥離を集中させる極端な片刃加工を示す。22は腹面に主要剥離面を残す扁平な打製石斧で、折損品を再加工したものとみられる。

23はやはり再加工品とみられるが、刃先が極端に

厚く、破損後の基部側を刃部として再生しようとしたものであろう。24は腹面に主要剥離面を残し背面に調整剥離が集中する亀甲形を呈する。25は腹面基部側に広く自然面の残るもので、破損後の基部側を再加工したものとみられる。26は甲高の石斧で、未製品とも考えられる。

石材は大半がホルンフェルスを使用する。16・17・22は砂岩を使用する。

27～32はスタンプ形石器である。包含層中から燃糸文土器が出土していることから、同時期のものと考えられるが、一方で中期後半にこれと類似の石器が出現することも知られている。

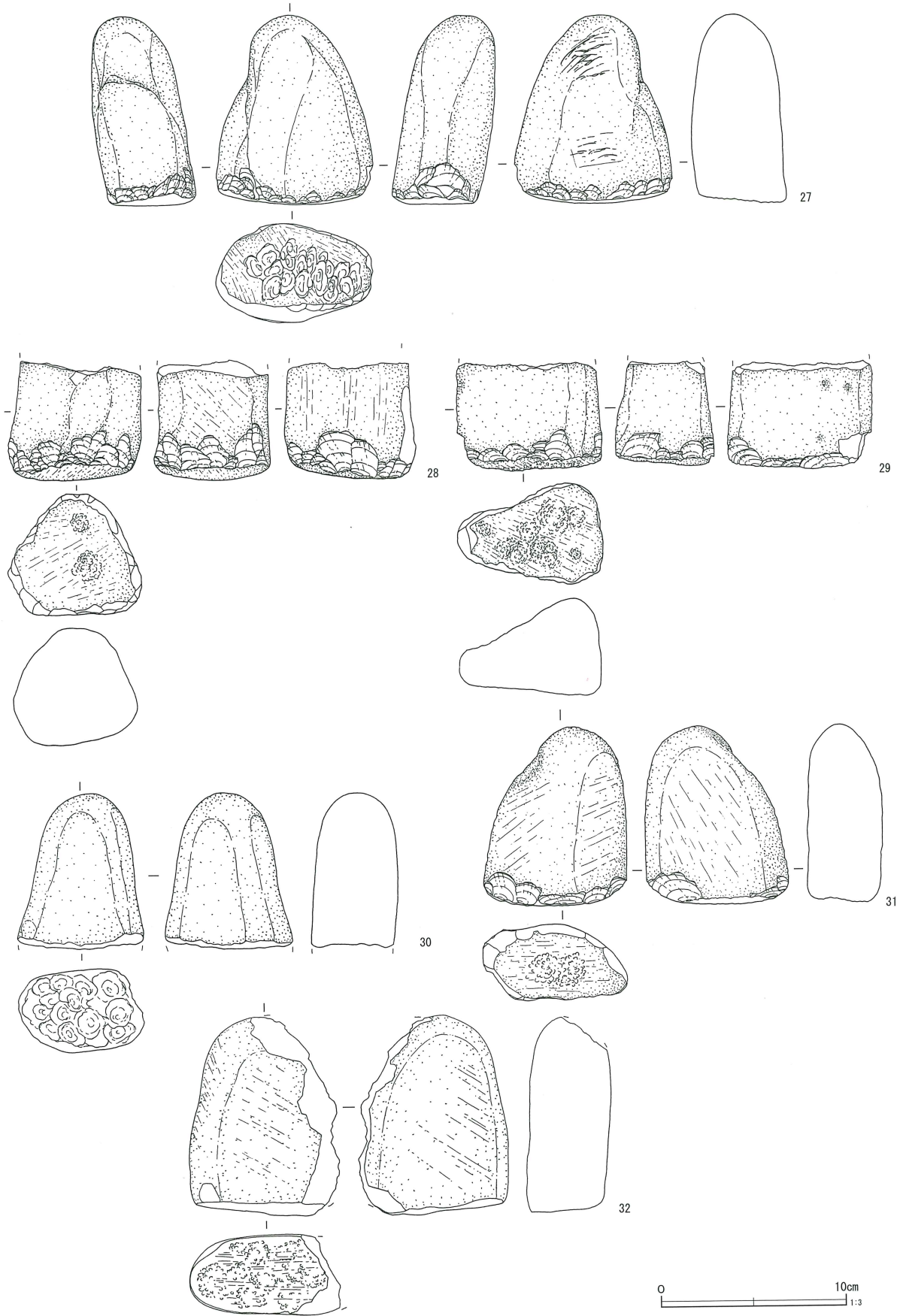
27は完形品である。自然礫の折損部を敲打および磨り面として使用しており、側面観は「凡」字形を示す。使用面には敲打および摩滅痕が観察され、縁辺部の自然面には使用に伴う細かな剥離が多数観察される。28～31にもまったく同じ特徴が観察される。32は折損した磨石を再加工したものと考えられる。右側縁の崩壊が自然のものか、握りを意識した加工であるかは不明である。

石材は閃緑岩が優勢で、砂岩と安山岩が1点ずつ存在するなど、石材の選択は磨石・凹石系の石器とほぼ共通している。

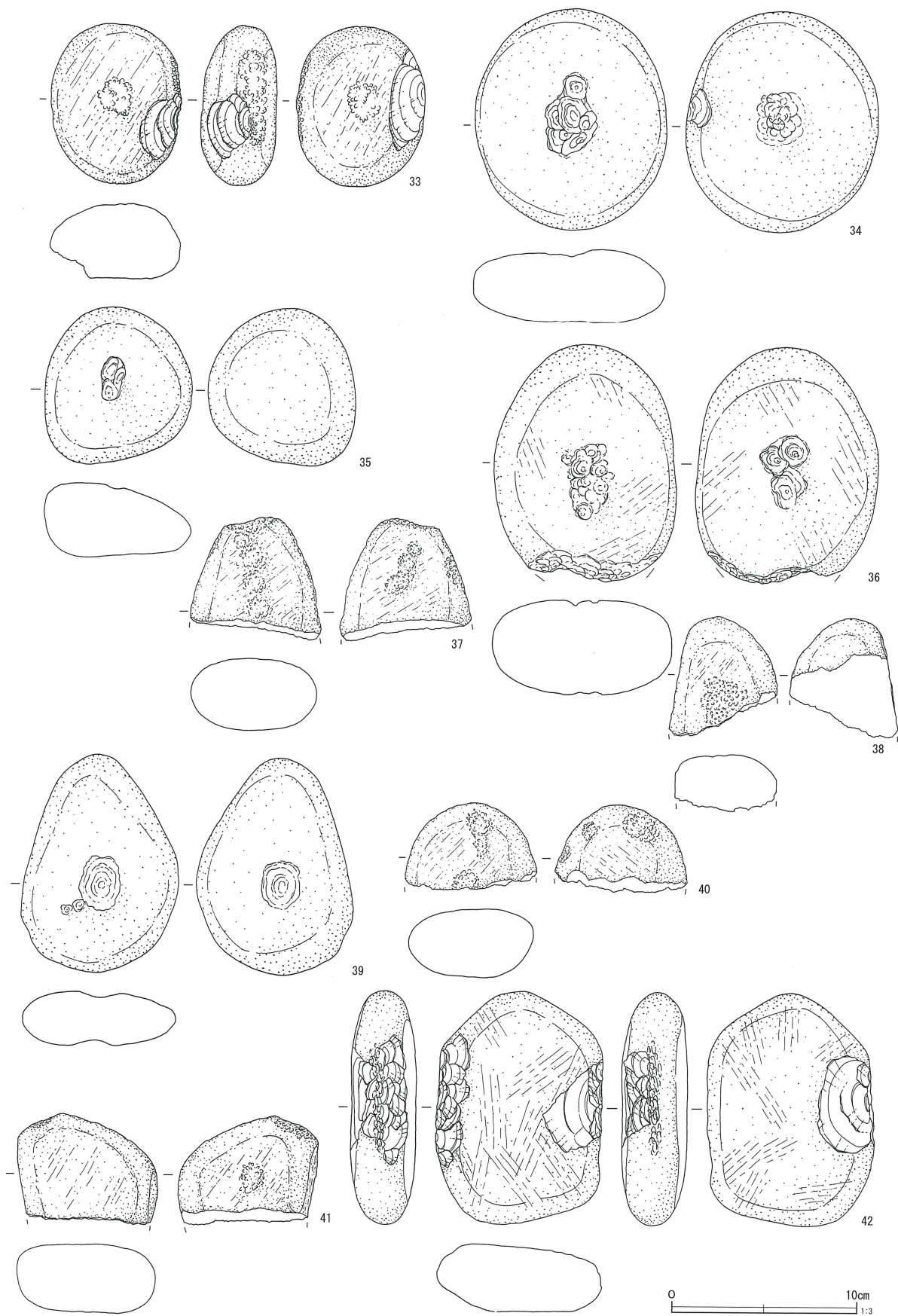
33～41は磨石転用の凹石である。大半は自然石を使用するが、33・34・36等はある程度の整形がなされている可能性がある。36はさらに敲石へと転用されている。石材は閃緑岩がほとんどで、砂岩製のものが少数混じる。

42は敲石である。扁平な不整五角形の自然礫の長編側をそれぞれ打面に使用している。硬質の安山岩を使用している。

43～53は磨石である。大半は自然石を使用するが、43・45・46等はある程度の整形がなされている可能性がある。石材は閃緑岩が優勢で、安山岩と砂岩が少数存在する。

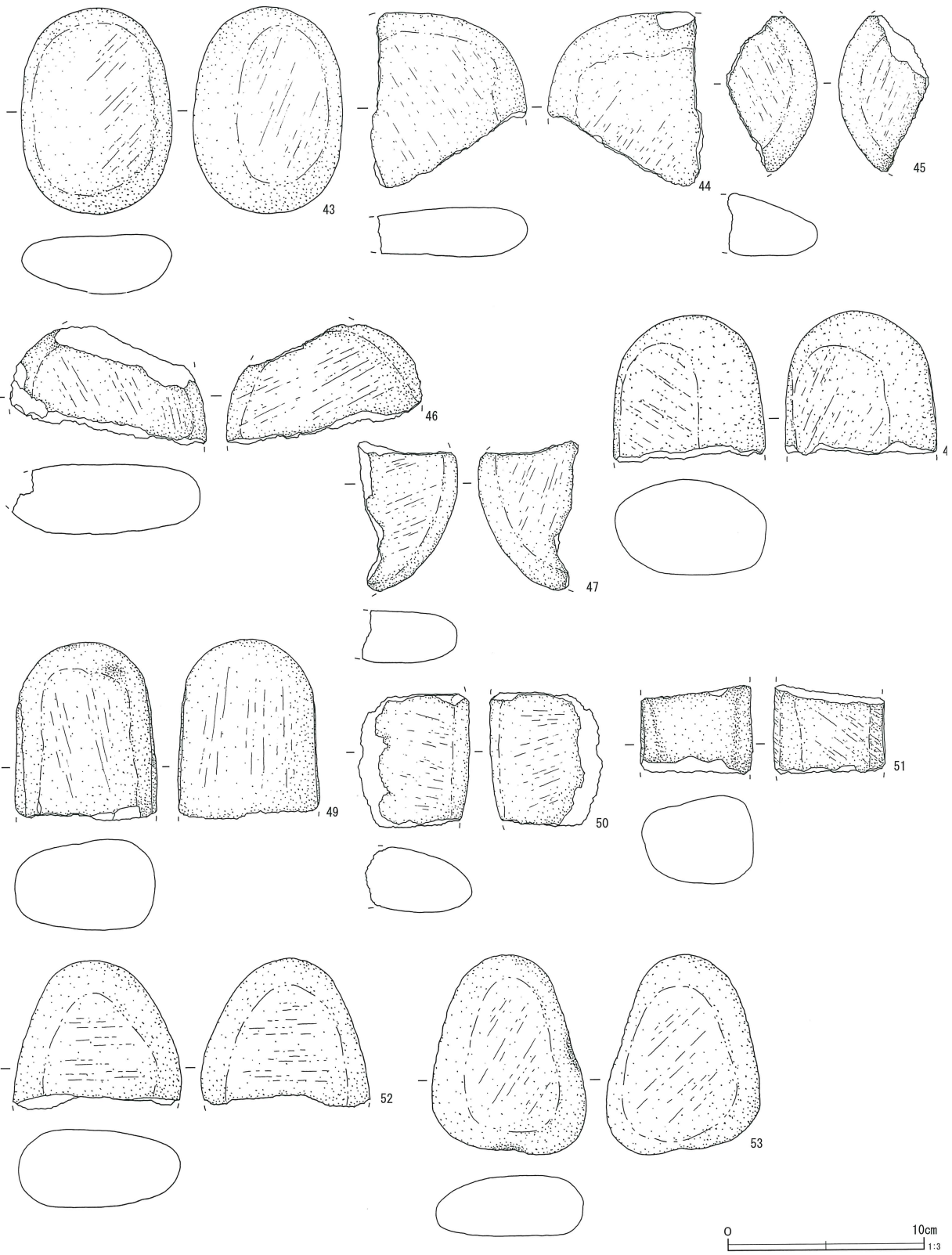


第63図 グリッド出土遺物 (8)



第64図 グリッド出土遺物 (9)





第65図 グリッド出土遺物 (10)

第10表 グリッド出土遺物観察表 (第61~65区)

番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	ナイフ形石器	黒曜石	3.1	1.1	0.5	1.3	SJ12
2	石鏃	ホルンフェルス	2.4	1.7	0.3	0.7	SJ12
3	石鏃	頁岩	1.7	1.6	0.2	0.4	SJ12
4	石鏃	チャート	1.6	1.0	0.2	0.2	表採
5	石鏃	チャート	1.6	1.2	0.4	0.4	D 5
6	石鏃	チャート	0.5	0.5	0.2	0.1	SK32
7	石鏃	チャート	1.6	1.2	0.2	0.3	SJ11
8	石鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.3	0.6	SJ16
9	石鏃	チャート	2.0	1.4	0.2	0.7	C 2
10	石鏃	チャート	2.0	1.7	0.3	0.8	SJ13
11	石鏃	チャート	1.6	1.2	0.3	0.5	C 6
12	尖頭器	ホルンフェルス	8.2	3.2	1.2	28.7	F 7
13	スクレイパー	頁岩	7.2	4.6	1.0	42.6	SK100
14	スクレイパー	黒色頁岩	2.9	6.5	1.3	24.8	F 3
15	打製石斧	ホルンフェルス	9.6	5.4	1.4	84.4	SJ12
16	打製石斧	砂岩	11.1	4.7	2.6	144.0	SJ10
17	打製石斧	砂岩	9.4	5.1	1.6	90.1	表採
18	打製石斧	ホルンフェルス	7.6	5.9	1.8	120.4	SD 2
19	打製石斧	ホルンフェルス	7.5	4.9	2.5	115.1	SJ14
20	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	4.7	2.6	141.2	表採
21	打製石斧	ホルンフェルス	9.4	5.0	2.5	118.3	表採
22	打製石斧	砂岩	10.0	5.8	1.3	74.4	SJ 3
23	打製石斧	ホルンフェルス	8.7	6.4	2.7	122.7	表採
24	打製石斧	ホルンフェルス	9.7	5.6	2.3	147.1	SJ13
25	打製石斧	ホルンフェルス	8.3	5.3	2.2	96.8	表採
26	打製石斧	ホルンフェルス	10.6	6.4	3.0	234.0	表採
27	スタンプ形石器	砂岩	10.1	8.4	4.7	604.8	表採
28	スタンプ形石器	安山岩	6.4	7.3	6.6	460.4	SK 5
29	スタンプ形石器	閃緑岩	8.3	6.8	4.6	389.8	E 4
30	スタンプ形石器	閃緑岩	9.6	7.8	4.2	442.5	表採
31	スタンプ形石器	閃緑岩	5.8	7.9	5.2	341.6	SK58
32	スタンプ形石器	閃緑岩	10.7	8.1	4.5	619.6	B 2
33	凹石	閃緑岩	8.6	7.0	4.0	366.2	E 5
34	凹石	砂岩	11.9	10.3	3.9	714.3	表採
35	凹石	閃緑岩	8.4	8.0	3.7	398.8	F 3
36	凹石	安山岩	12.5	9.8	5.0	849.5	SJ10
37	凹石	閃緑岩	6.5	7.1	3.8	235.4	E 5
38	凹石	閃緑岩	6.3	5.8	4.2	154.7	SJ10
39	凹石	砂岩	11.6	8.4	3.1	380.7	表採
40	凹石	閃緑岩	4.7	7.1	3.6	164.0	表採
41	凹石	閃緑岩	6.0	7.6	3.7	255.3	B 2
42	敲石	安山岩	12.5	9.0	3.6	568.3	SJ11
43	磨石	閃緑岩	10.4	7.6	3.0	373.2	E 2
44	磨石	安山岩	8.9	7.9	2.5	248.9	表採
45	磨石	閃緑岩	7.9	4.6	3.3	123.2	SK106
46	磨石	閃緑岩	6.0	1.0	3.5	248.3	B 2
47	磨石	砂岩	7.5	5.1	2.9	109.3	SK106
48	磨石	閃緑岩	7.3	7.8	4.8	422.2	表採
49	磨石	閃緑岩	9.0	7.2	5.2	516.2	E 4
50	磨石	閃緑岩	6.7	5.7	3.3	196.9	SK106
51	磨石	安山岩	4.5	5.7	4.5	204.5	表採
52	磨石	安山岩	7.5	8.6	4.0	353.9	D 5
53	磨石	閃緑岩	10.0	7.8	3.1	416.3	SJ10

## 2. 古墳時代以降の遺構と遺物

### (1) 住居跡

#### 第1号住居跡 (第66図)

G-4グリッドに位置する。東半部は調査区域外にあり、南壁は攪乱に壊されていた。平面形は東西に長い長方形と考えられる。検出された規模は東西2.41m、南北2.44m、深さは0.23~0.25mである。主軸方位はN-19°-Wを指す。

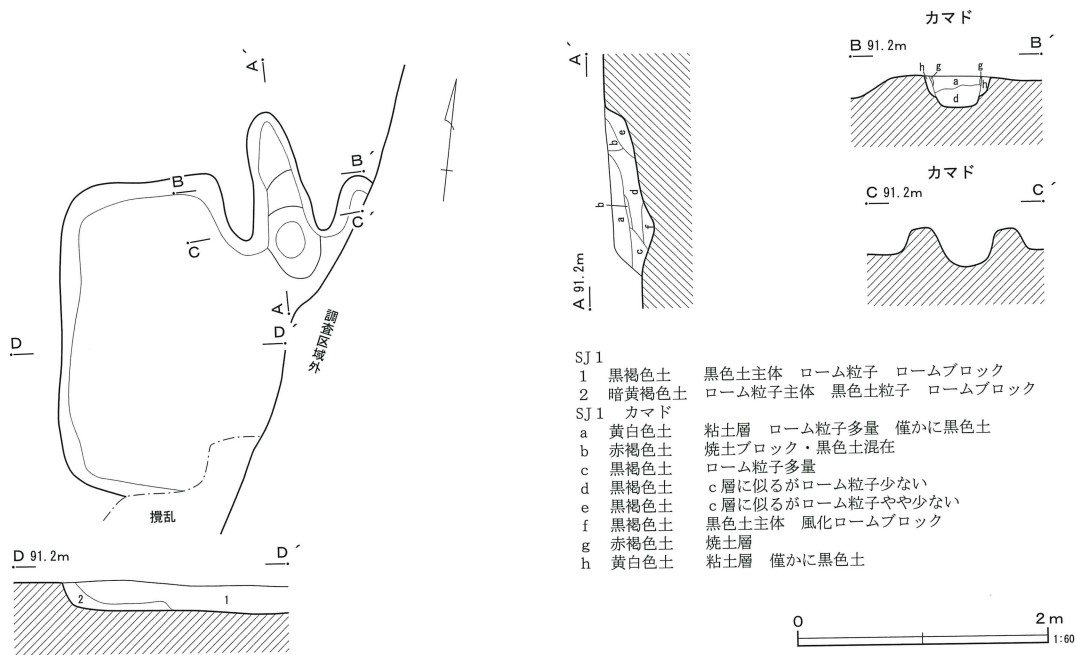
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ち上がる。覆土は2層で、比較的短時間に埋没したと考えられる。

カマドは北壁に設置される。燃焼部は8cmほど掘

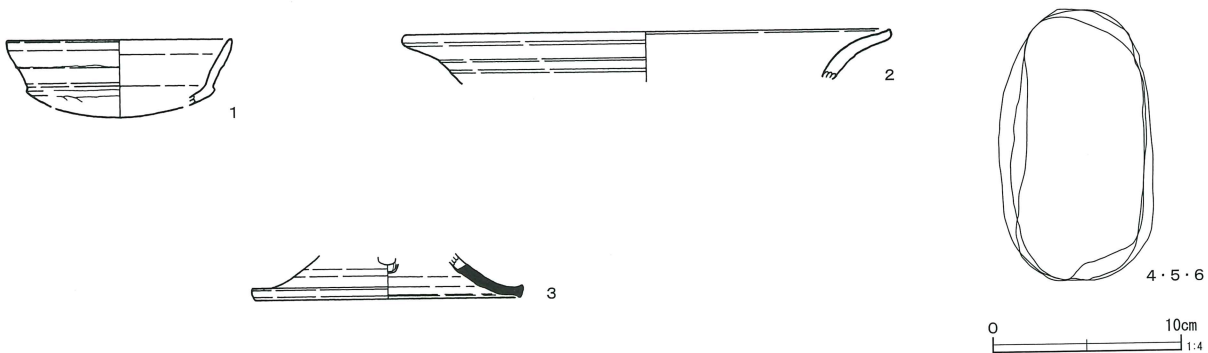
り込み、緩やかに上がりながら煙道部となる。覆土最上層に黄白色粘土層が確認され(a層)、袖は地山で構築されていた。地山の袖に粘土で天井を築いたと考えられる。煙道部には粘土が貼られ(g層)、その内側に焼土層が確認された(h層)。

貯蔵穴、壁溝、ピットは検出されなかった。

出土遺物は極少量である。大半が小片で、接合率は極めて悪く、図示したものの残存率は低い。これら以外に須恵器の甕胴部の細片が認められた。編物石が3点出土した。



第66図 第1号住居跡



第67図 第1号住居跡出土遺物

第11表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第67図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	(3.5)	—	A・C・E・H・I	20	良好	にぶい褐		炭化物付着	
2	須恵器	高坏	—	(2.3)	(14.0)	B・E	10	良好	灰			
3	土師器	甕	(26.0)	(2.5)	—	C・E・I	10	良好	にぶい橙			
4		編物石	重: 885.9 g		チャート							
5		編物石	重: 597.8 g		砂岩							
6		編物石	重: 710.3 g		砂岩							

第2号住居跡 (第68図)

G-4 グリッドに位置する。平面形は正方形に近く、東西2.68m、南北2.44m、深さは0.33~0.43mである。主軸方位はN-78°-Eを指す。

床面は南側がやや高くなる傾向が見られ、壁は開きながら立ち上がる。覆土は大きく2層に分けられ、比較的短時間で埋没したと考えられる。

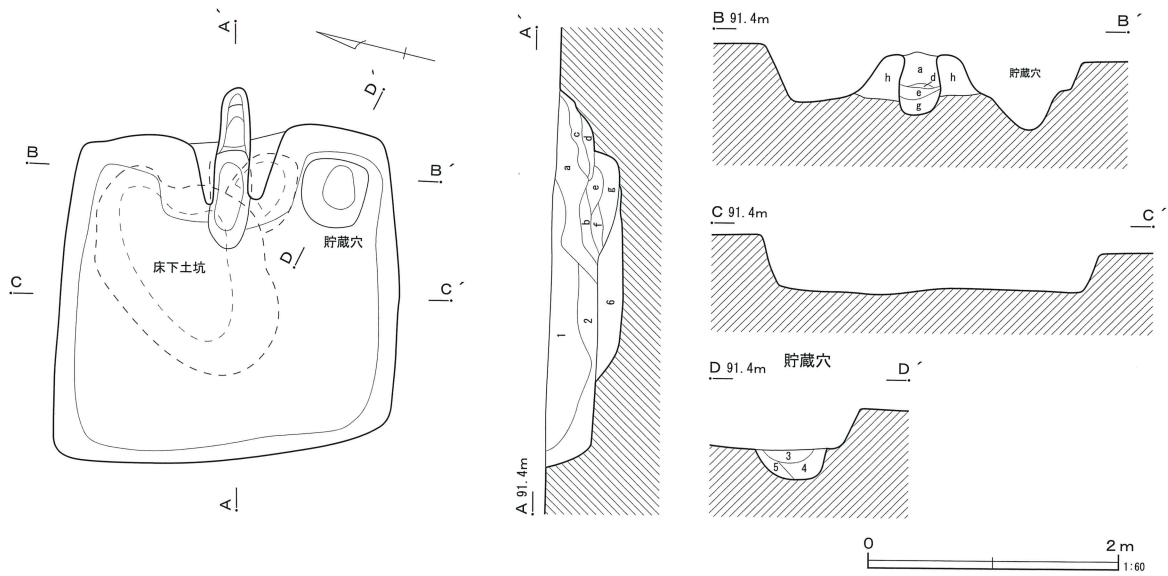
カマドは東壁の中央に設置される。燃焼部は20cmほど掘り込み、垂直に立ち上って煙道へ続く。煙道部には小さな段が検出された。覆土最上層に黄白色粘土を主体とした層が観察された(a層)。袖は黄白

色粘土と黒褐色土によって構築されていた(h層)。袖の構築土は、カマド左右の壁を結ぶラインまで観察された。

貯蔵穴はカマド右側の南東コーナーに検出された。64×59cmの正方形に近く、深さは26cmであった。壁溝、ピットは検出されなかった。

北東コーナーからカマドにかけて床面から床下土坑が検出された。床面からの深さは25cmであった。

出土遺物は小片が少量で、接合率は極めて悪く、図示したものの残存率は低い。これら以外に、須恵器甕の胴部、土師器甕の小片が認められた。



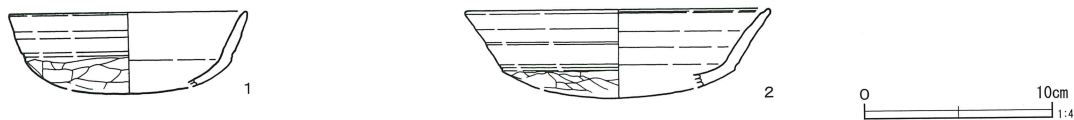
SJ2

- 1 暗黄褐色土 ローム粒子多量
- 2 黒褐色土 黒色土主体 僅かにローム粒子
- 3 黒褐色土 ローム粒子 焼土粒子
- 4 暗黒褐色土 ローム粒子少量
- 5 黒褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗黄褐色土 床下土坑 黒色土主体 ロームブロック多量

SJ2 カマド

- a 黄白色土 粘土主体 僅かに黒色土
- b 黄白色土 a層に似るが黒色土多量
- c 赤褐色土 焼土主体
- d 黒褐色土 炭化粒子多量
- e 赤褐色土 c層に似るが焼土の混入やや少ない
- f 赤褐色土 e層に似るが焼土の混入より少ない
- g 黒褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック多量
- h 黄白色土 カマド袖 粘土・黒褐色土の混土層

第68図 第2号住居跡



第69図 第2号住居跡出土遺物

第12表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	焼成(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	坏	(12.4)	(3.9)	—	B・C・I	25	良好	橙		磨滅顕著	
2	土師器	坏	(16.0)	(4.1)	—	B・I	25	良好	にぶい橙	No.2	炭化物全面 (外面一部)	

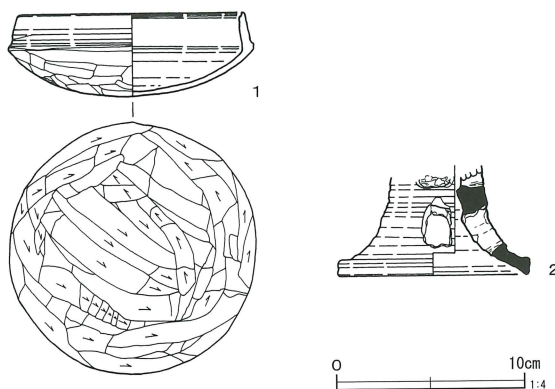
第3号住居跡 (第71図)

F-3、G-3グリッドに位置する。北東コーナー周辺を第1号土坑に、南東コーナー周辺を攪乱に壊されていた。平面形は正方形に近く、東西3.16m、南北2.91m、深さは0.06~0.28mである。主軸方位はN-39°-Eを指す。

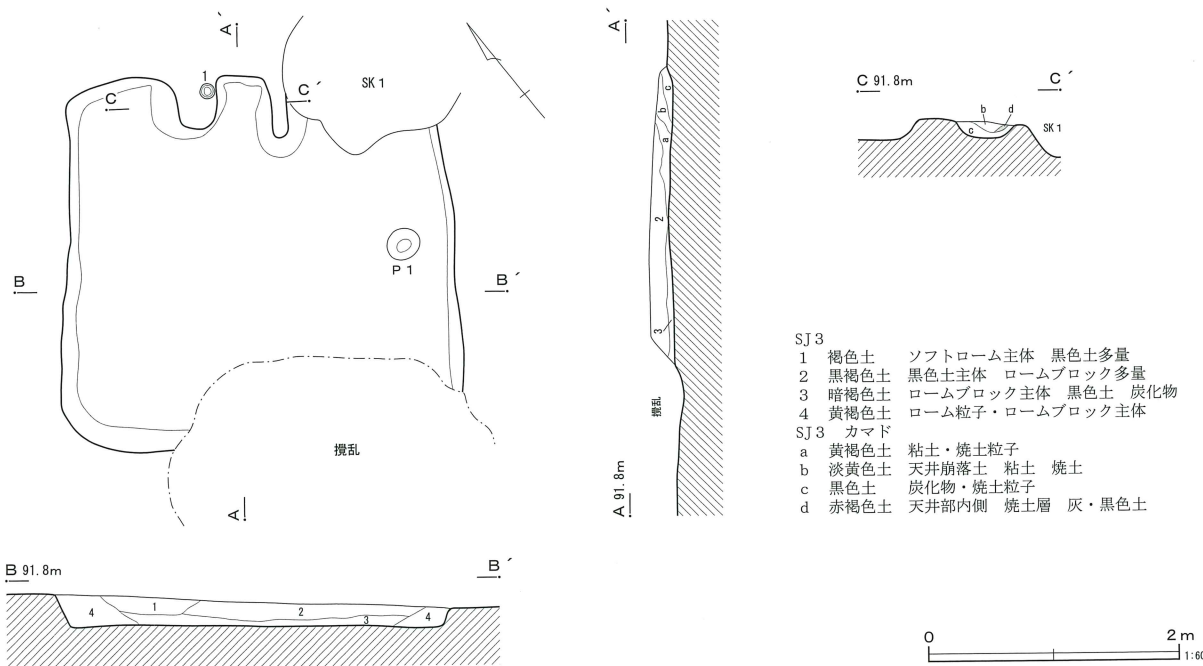
床面は緩やかな起伏があり、壁は開きながら立ち上がる。覆土は4層に分けられ、何れもローム粒子またはロームブロックが混入していた。

カマドは北壁の中央よりやや西寄りに設置される。燃焼部の掘り込みはなく、袖は地山によって構築されていた。

ピットは東壁近くで1基検出され、深さは23cmであった。貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。



第70図 第3号住居跡出土遺物



第71図 第3号住居跡

出土遺物は小片が極少量で、ほとんど接合しな  
められた。図示した器種以外に、土師器甕の小片が認  
められた。図示した器種以外に、土師器甕の小片が認

第13表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	坏	11.9	4.4	—	C・H・I	100	良好	にぶい橙	No. 1		57-1
2	須恵器	高坏	—	(5.7)	10.0	B・G・I	90	良好	灰		末野産 ロクロ左回転	57-2

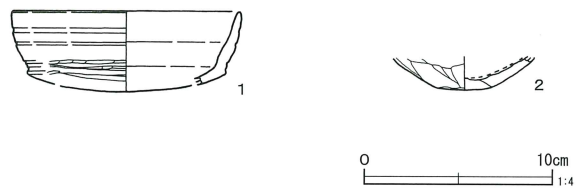
第4号住居跡 (第73図)

F-2・3グリッドに位置する。第5号住居跡・  
第10号住居跡と重複し、新旧関係は、何れの住居跡よ  
りも本住居跡が古い。平面形は正方形で、東西4.74  
m、南北4.82m、深さは0.04~0.28mである。主軸方  
位はN-44°-Eを指す。

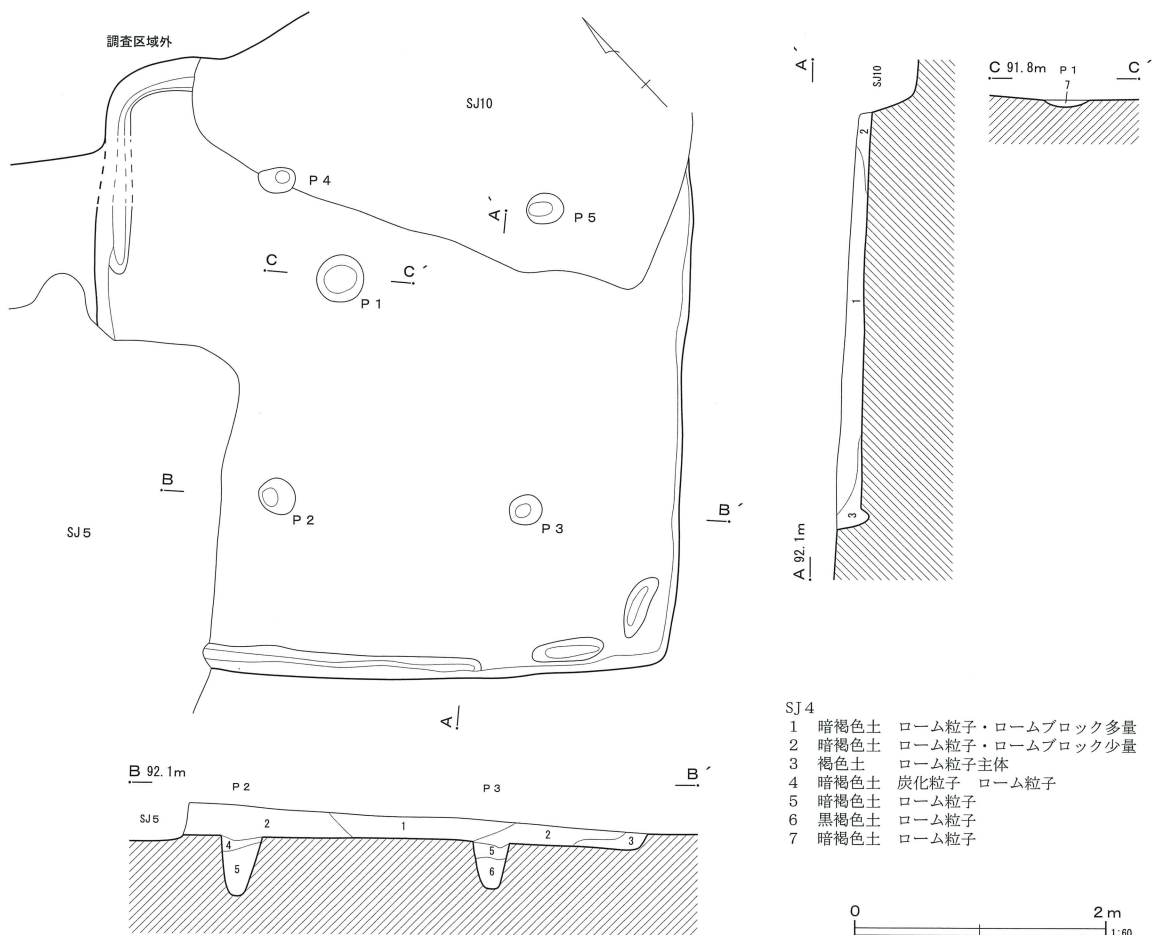
床面は僅かに東側が低くなっており、壁は開き気  
味に立ち上がる。覆土は3層に分けられ、何れも  
ローム粒子・ロームブロックが混入していた。

カマドは検出されなかった。第10号住居跡に壊さ  
れた北壁に設置されていた可能性が考えられる。

貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北西コーナ  
ー付近と南壁で断続的に検出され、幅16~30cm、深さ



第72図 第4号住居跡出土遺物



第73図 第4号住居跡

4～8cmである。ピットは5基検出された。このうちP4とP5は第10号住居跡の壁面および床面から検出された。P2～P5は位置から柱穴と考えられる。深さはP1から7cm・46cm・37cm・58cm・65cmで

ある。

出土遺物は小片が少量で、接合率は極めて悪い。図示した器種以外に、器種不明の須恵器片が認められた。

第14表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第72図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	(3.9)	—	B・C・E・H・I	10	良好	橙			
2	土師器	甗	—	(1.6)	2.8	B・C・E・I	70	良好	黒褐		SJ10貯穴と接合 剥離顕著 被熱?	

第5号住居跡 (第74図)

F-2・3グリッドに位置する。第4号住居跡、F-3グリッドーピット8と重複し、新旧関係は第4号住居跡より新しく、ピット8より古い。平面形は南北に僅かに長い長方形で、長軸3.95m、短軸3.65m、深さは0.21～0.40mである。主軸方位はN-58°-Eを指す。

床面は中央部が僅かに高い傾向が見られる。壁は開き気味に立ち上がる。覆土は4層に分けられ、自然堆積と考えられる。床面全体に貼床が確認された(8層)。

カマドは北壁中央に設置される。燃焼部は僅かに掘り込み、垂直に立ち上がって煙道へ続く。覆土は最上層に淡黄色粘土層(a層)が、その下層に焼土

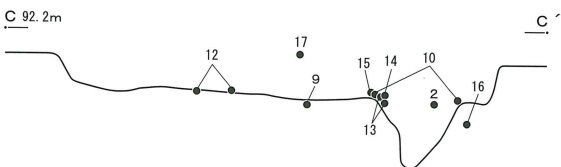
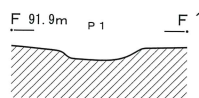
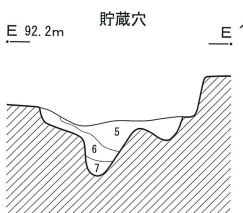
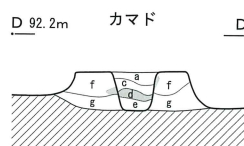
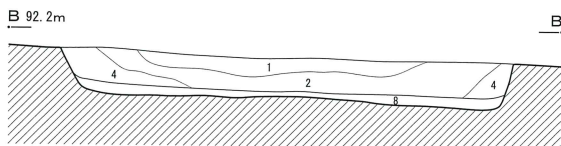
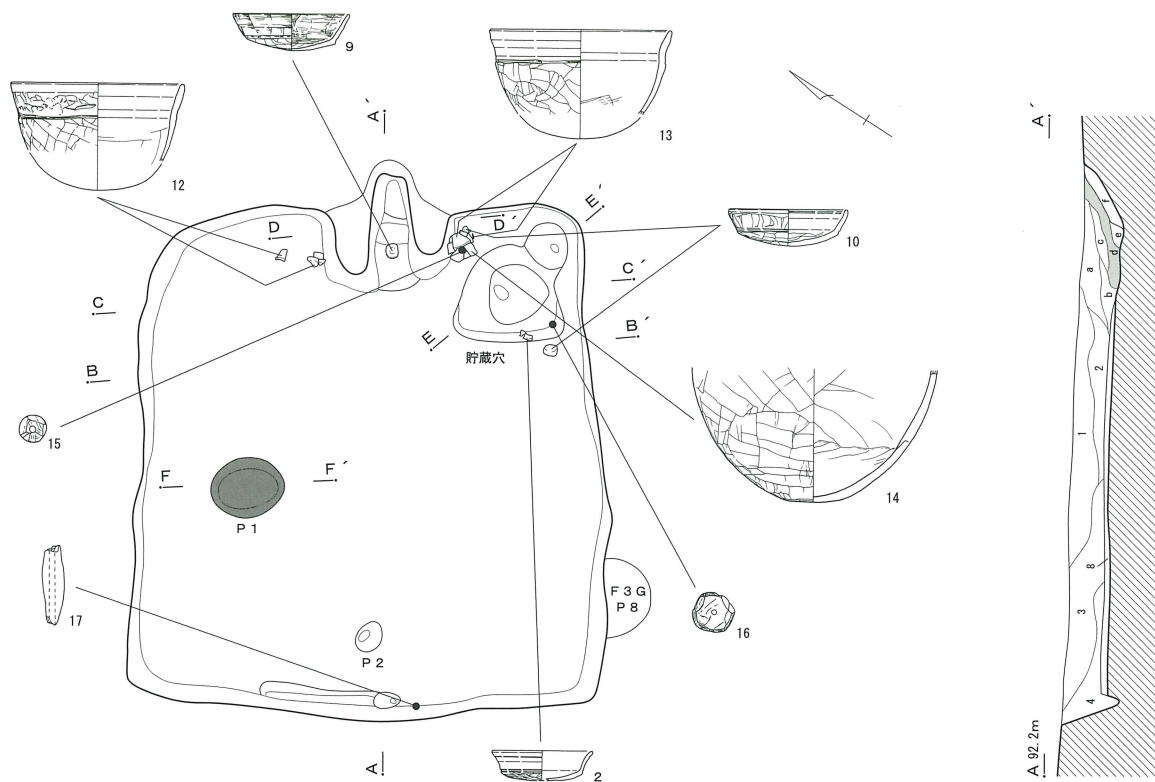
ブロックを含む層(c層)や焼土層(d層)が観察された。袖の上半は小石を含む淡黄色粘土層(f層)で、下半を黒褐色土(g層)で構築されていた。煙道部周囲には掘り方が検出され、淡黄色粘土層(f層)が観察された。

貯蔵穴はカマド右の北東コーナー近くで検出された。114×86cmの不整形で、深さ58cmである。壁溝は南壁の中央付近で検出された。幅19～24cm、深さ3cmである。ピットは2基検出された。P1は深さ7cmと浅いが炭化物が出土した。P2は深さ12cmである。

遺物は主にカマドや貯蔵穴周辺から出土した。量は多くなく、図示したもの以外は小片で、接合率は悪い。白玉2点が貯蔵穴脇で、土錘1点が南壁際で出土した。須恵器は認められなかった。

第15表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版	
1	土師器	坏	(10.3)	(2.2)	—	A・C・H・I	10	良好	にぶい黄褐	No.12	絹雲母か?	57-3	
2	土師器	坏	(10.4)	(3.1)	—	C・E・H・I	30	普通	明黄褐		器壁堅緻		
3	土師器	坏	(12.0)	(3.6)	—	B・C・H・I	20	良好	明黄褐		一部黒斑 歪みあり		
4	土師器	坏	(11.7)	(3.3)	—	B・C・I	10	良好	橙				
5	土師器	坏	12.6	4.0	—	C・H・I	80	良好	橙				
6	土師器	坏	(12.0)	(3.9)	—	C・H	10	良好	橙				
7	土師器	坏	(10.8)	(2.8)	—	C・I	10	良好	橙				
8	土師器	坏	(13.0)	(4.4)	—	C・H・I	15	良好	橙				
9	土師器	坏	12.3	3.9	—	C・E・H・I	90	良好	橙		No.5		
10	土師器	坏	12.7	3.9	—	C・E・H・I	90	良好	にぶい橙	No.8・14			
11	土師器	短頸壺	(14.0)	(11.5)	—	C・E・H・I	20	良好	にぶい黄橙				
12	土師器	鉢	(18.0)	(8.0)	—	C・E・H・I	50	良好	にぶい橙	No.2・3	内外面一部黒斑あり	54-3	
13	土師器	鉢	(18.2)	(8.8)	—	B・C・H・I	30	良好	にぶい黄褐	No.6・9・10		54-4	
14	土師器	甗	—	(14.0)	6.0	B・C・G・H・I	60	良好	明赤褐	No.6		54-5	
15	石製品	白玉	滑石 孔径:0.3cm 最大径:1.5cm 上面径:1.5cm 下面径:1.5cm 厚:1.2cm 重:4.2g								No.7		61-2
16	石製品	白玉	滑石 孔径:0.2cm 最大径:2.2cm 下面径:2.2cm 厚:0.9cm 重:6.3g								No.16	貯蔵穴	61-2
17	土製品	土錘	口径:0.5cm 長:6.3cm 径:1.7cm 重:14.0g				90			黄褐	No.15		61-1

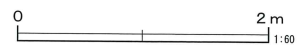


SJ5

- 1 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子微量
- 3 暗褐色土 ローム粒子 ロームブロック 炭化粒子
- 4 黒褐色土 ローム粒子 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色土 ローム粒子 炭化粒子
- 6 褐色土 ローム粒子主体 貼床の流込み土
- 7 褐色土 ロームブロック
- 8 黄褐色土 貼床層 黒色土 ローム粒子

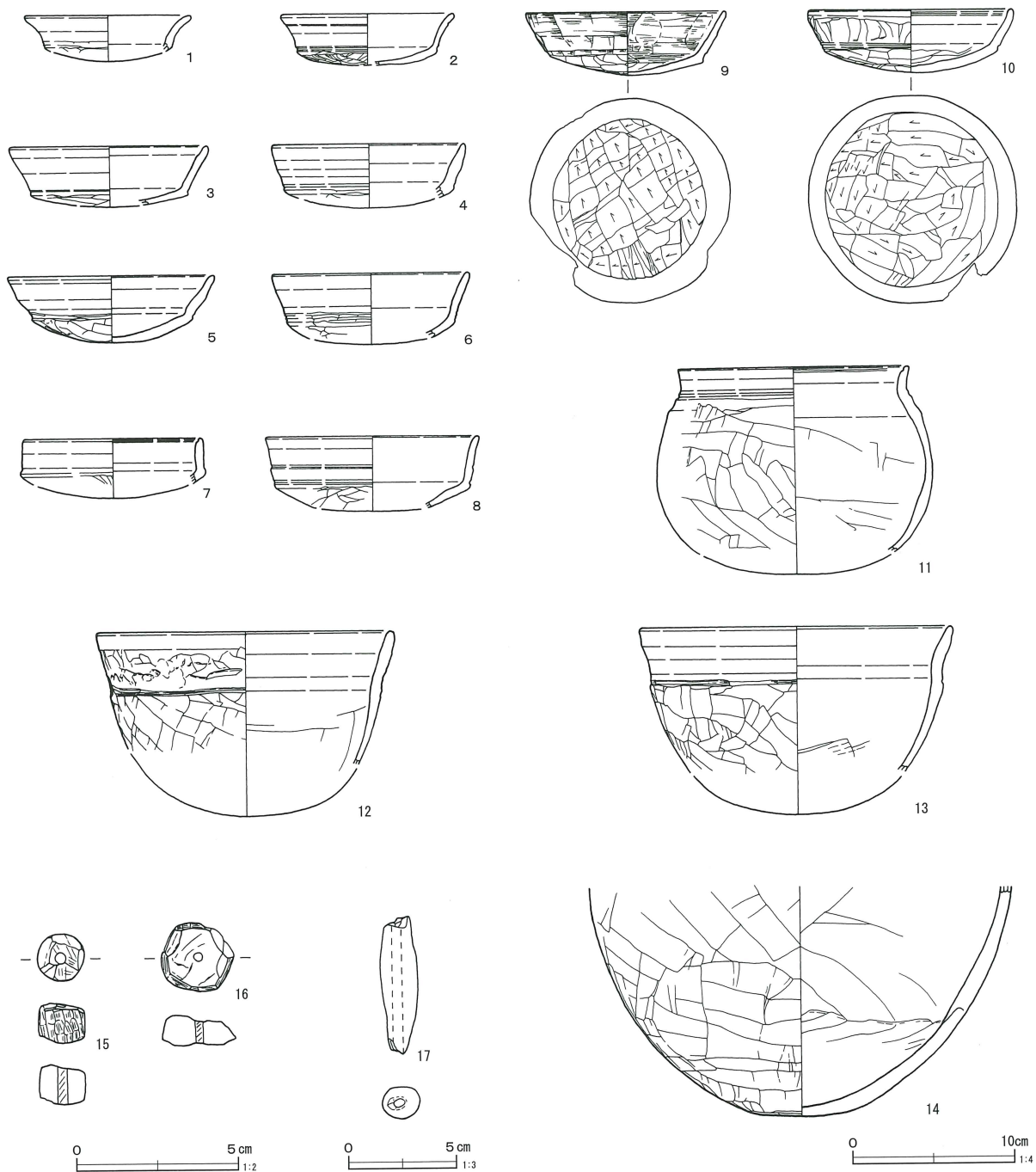
SJ5 カマド

- a 淡黄色土 粘土層 焼土粒子
- b 黒褐色土 炭化粒子 焼土粒子
- c 橙色土 焼土ブロック多量
- d 赤褐色土 焼土層 天井崩落土
- e 黒褐色土 炭化粒子 焼土粒子 焼土ブロック
- f 淡黄色土 粘土層 小石 (φ5mm) 多量
- g 黒褐色土 炭化粒子 焼土粒子



第74図 第5号住居跡





第75図 第5号住居跡出土遺物

第7号住居跡 (第76・77図)

E-3・4、F-3グリッドに位置する。第1号道路跡、倒木痕と重複し、本住居跡はその何れよりも古い。平面形は東西に長い長方形で、長軸5.06m、短軸3.84m、深さは0.20~0.39mである。主軸方位はN-42°-Eを指す。

床面は緩やかな起伏が見られ、壁は開きながら立

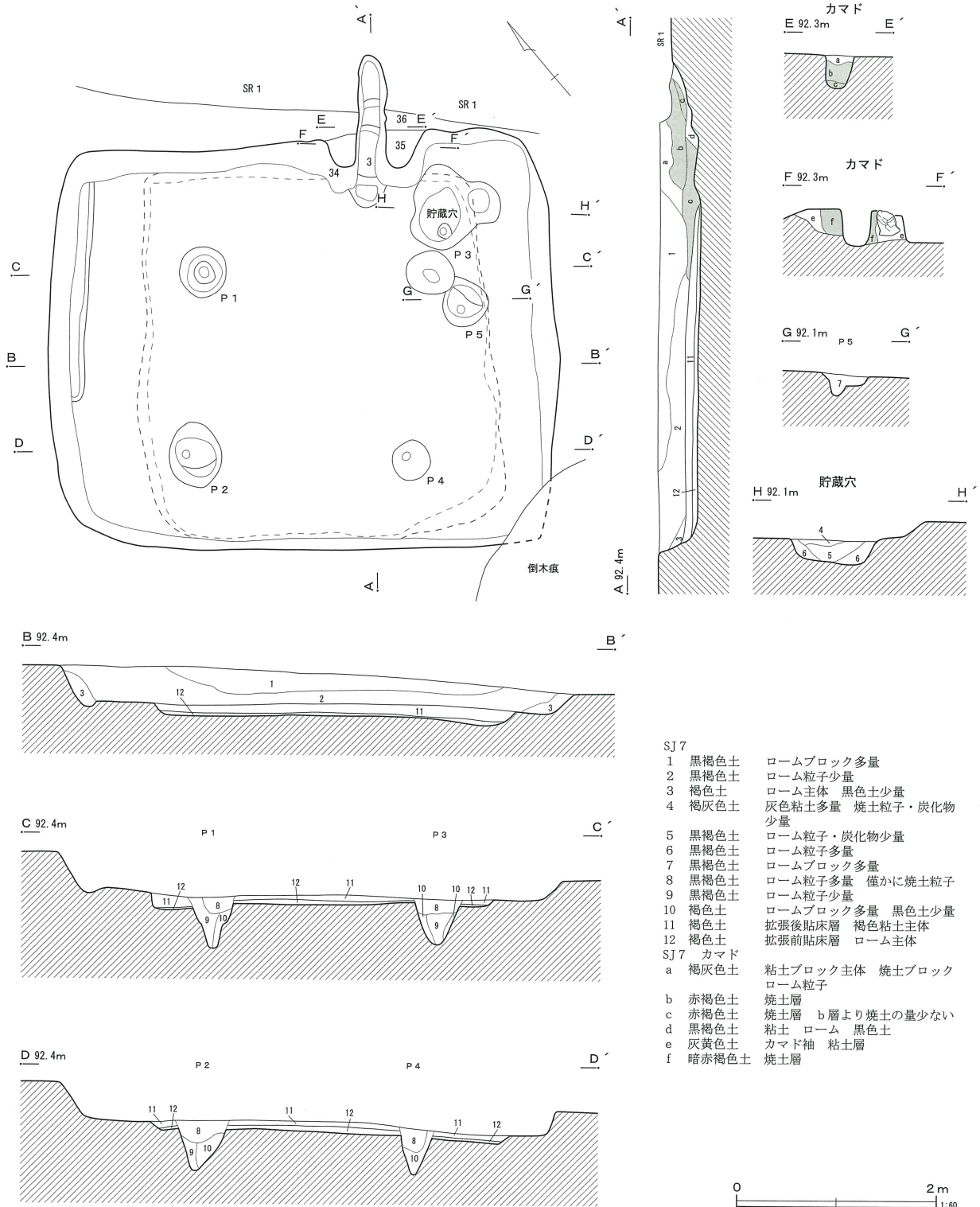
ち上がる。覆土は3層に分けられ、概ね自然堆積と考えられる。

カマドは北壁中央より南寄りに設置される。燃焼部は5cm程掘り込み、開きながら立ち上がり、階段状の煙道へ続く。覆土は上層に粘土ブロックを主体とする層(a層)が、下層には焼土層(b・c層)が観察された。袖は灰黄色粘土(e層)によって構

築されており、右袖には補強のための土師器甕が倒位に設置されていた。袖内側は大きく焼土化していた。袖の構築粘土は、カマド左右の壁を結ぶライン

まで観察された。

貯蔵穴はカマド右に検出された。86×85cmの不整形形で、深さは25cmである。貯蔵穴の底に径15cm、深さ



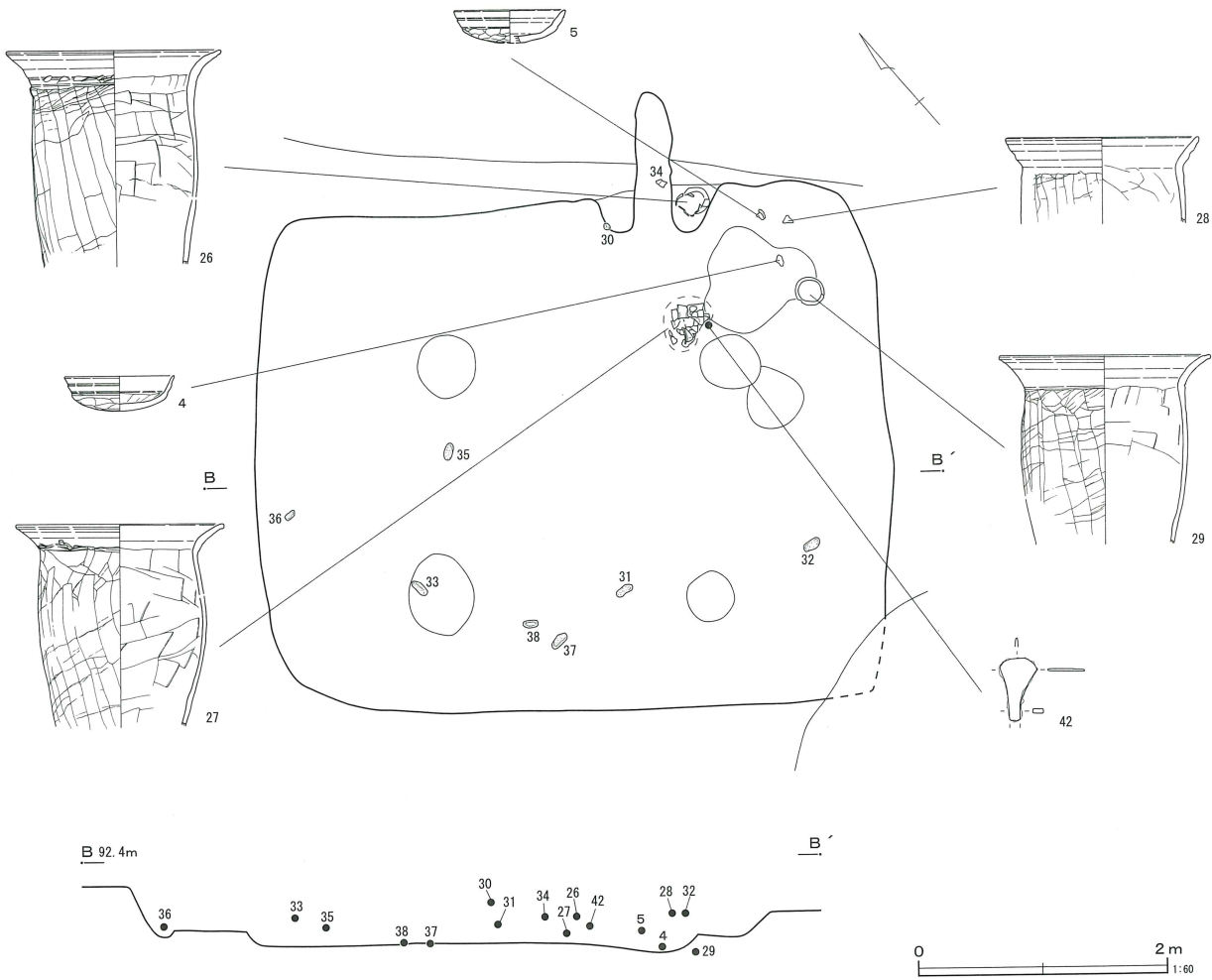
第76図 第7号住居跡

11cmの小ピットが検出された。壁溝は西壁の一部で検出され、幅32~36cm、深さ約5cmである。ピットは5基検出された。P2~P5は位置から柱穴と考えられる。深さはP1から54cm・51cm・50cm・49cm・30cmである。

床面中央部に貼床(11層)が確認された。この貼床の下層にさらに床面(貼床・12層)が確認された。このことから本住居跡は、当初東西3.5m程度の住居と

して建てられ、後に東西両方向に拡張したと考えられる。

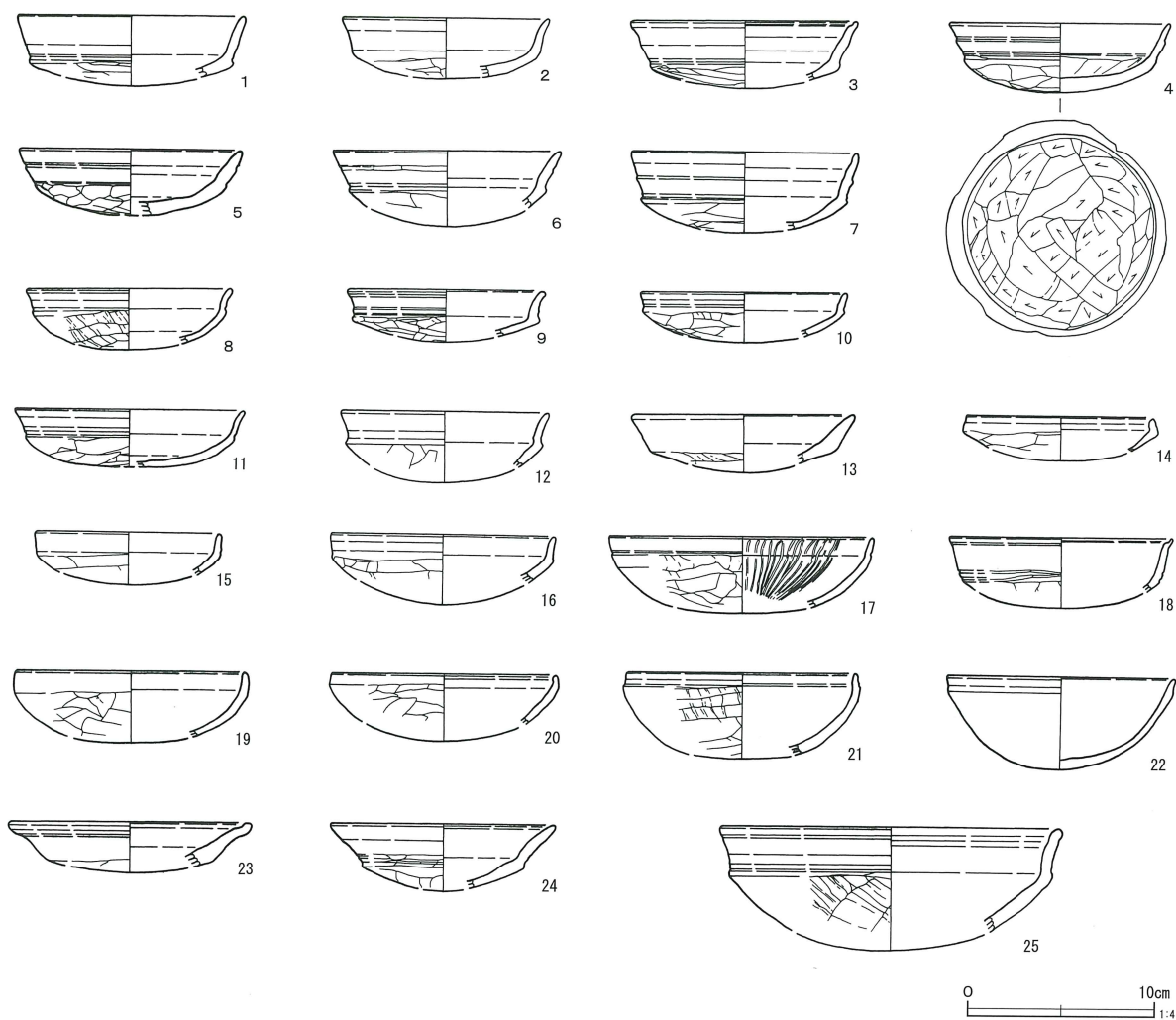
遺物は多量に出土した。特に土師器甕片が多いが、図示したもの以外は小片で殆ど接合しない。須恵器は4片出土した。何れも器種が確定できないほどの小片である。編物石が9点出土したが、出土状況は散漫である。



第77図 第7号住居跡遺物出土状況

第16表 第7号住居跡出土遺物観察表(1)(第78図)

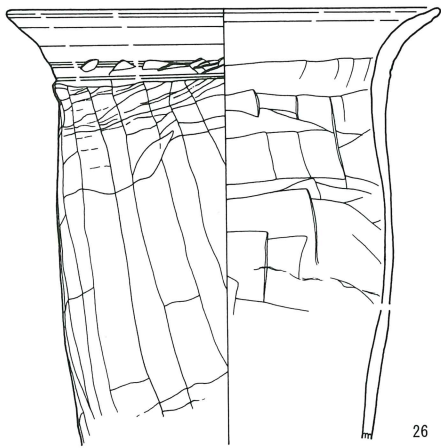
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	坏	(12.0)	(3.3)	—	C・E・H	10	良好	橙	貯穴	磨滅顕著 炭化物付着 胎土精緻 胎土精緻	57-6
2	土師器	坏	(11.0)	(3.1)	—	C・E・H・I	15	良好	橙	P1		
3	土師器	坏	(12.0)	(3.1)	—	C・H・I	20	普通	橙	No.6.カマド		
4	土師器	坏	11.8	3.8	—	C・H	100	普通	にぶい橙	No.4		
5	土師器	坏	(11.8)	(3.4)	—	C・I	30	良好	灰褐			
6	土師器	坏	(12.0)	(3.0)	—	C・I	20	良好	灰黄褐			
7	土師器	坏	(12.0)	(4.1)	—	C・H・I	10	良好	橙	貯穴		



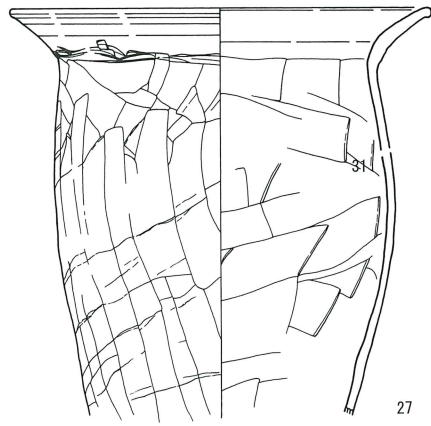
第78図 第7号住居跡出土遺物(1)

第17表 第7号住居跡出土遺物観察表(2)(第78図)

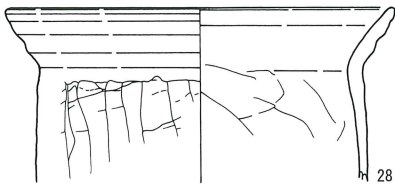
番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
8	土師器	坏	(10.0)	(2.9)	—	C・H	10	良好	橙			
9	土師器	坏	(10.6)	(2.4)	—	C・I	20	良好	橙		胎土精緻	
10	土師器	坏	(11.0)	(2.3)	—	C・H・I	20	良好	橙		磨滅顕著	
11	土師器	坏	(12.2)	(3.1)	—	C・I	30	良好	明赤褐			
12	土師器	坏	(11.0)	(3.0)	—	C・H・I	10	普通	橙		磨滅顕著	
13	土師器	坏	(11.8)	(2.6)	—	C・H	10	良好	にぶい黄褐			
14	土師器	坏	(10.0)	(1.8)	—	C・H・I	10	良好	橙		胎土精緻	
15	土師器	坏	(9.8)	(2.2)	—	C・H	10	良好	にぶい橙			
16	土師器	坏	(12.0)	(2.5)	—	C・E・I	20	良好	橙		胎土精緻	
17	土師器	坏	(12.0)	(3.8)	—	C・G	15	良好	橙		胎土精緻	暗文あり
18	土師器	坏	(12.0)	(2.8)	—	C・I	10	良好	橙			
19	土師器	坏	(12.0)	(3.4)	—	C・E・H・I	10	普通	橙		磨滅顕著	
20	土師器	坏	(12.0)	(2.6)	—	C・H・I	10	良好	橙			
21	土師器	坏	(12.2)	(4.3)	—	C・I	10	良好	橙		胎土精緻	
22	土師器	坏	(12.0)	4.8	—	A?・H・I	30	普通	橙		胎土精緻 網雲母片岩か? 磨滅顕著	
23	土師器	皿	(13.0)	(2.3)	—	C・E・H・I	10	良好	にぶい黄褐		磨滅顕著	
24	土師器	皿か	(12.0)	(3.4)	—	C・E・G・I	10	良好	橙			
25	土師器	坏	(18.4)	(5.6)	—	C・I	10	良好	橙		胎土精緻 砂質 磨滅顕著	



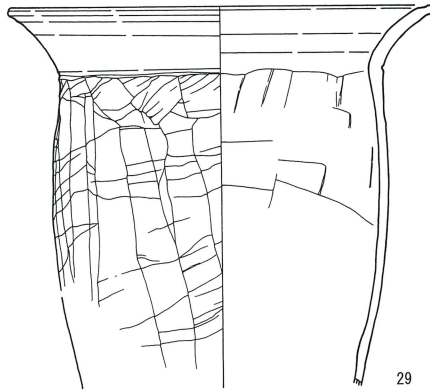
26



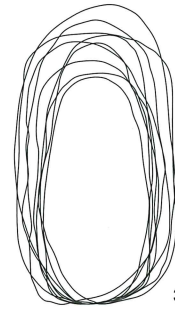
27



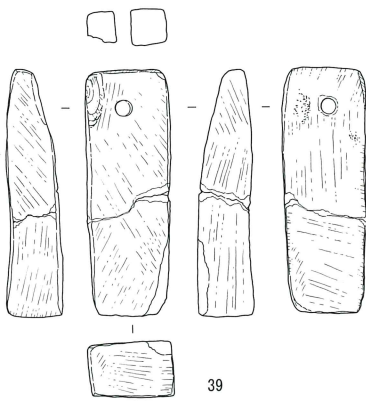
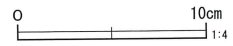
28



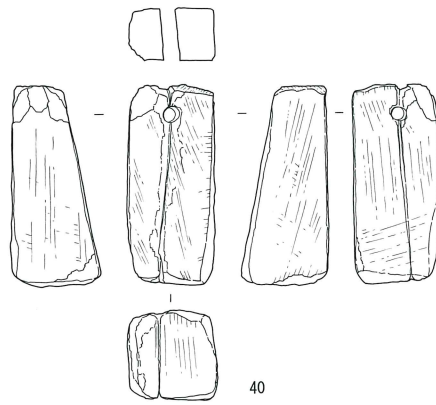
29



30~38



39



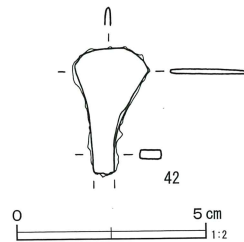
40



41



42



第79図 第7号住居跡出土遺物(2)

第18表 第7号住居跡出土遺物観察表(3) (第78・79図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版	
26	土師器	甕	22.7	(23.0)	—	B・C・E・G・I	70	良好	橙	No.35		55-1	
27	土師器	甕	21.8	(21.5)	—	B・C・G・H・I	70	良好	橙	No.1		55-2	
28	土師器	甕	(20.4)	(9.2)	—	C・G・H・I	20	良好	橙	No.5			
29	土師器	甕	22.2	(20.0)	—	C・E・H・I	85	良好	橙	No.2		55-3	
30		編物石	重さ：564.3g			砂岩				No.34			
31		編物石	重さ：766.2g			砂岩				No.25			
32		編物石	重さ：686.9g			砂岩				No.16			
33		編物石	重さ：702.8g			砂岩				No.29			
34		編物石	重さ：570.5g			絹雲母片岩							
35		編物石	重さ：378.3g			緑泥片岩				No.24			
36		編物石	重さ：299.7g			砂岩				No.26			
37		編物石	重さ：488.9g			砂岩				No.42			
38		編物石	重さ：628.9g			砂岩				No.41			
39	石製品	砥石	泥岩 長：9.7cm 幅：3.4cm 厚：2.2cm 重：128.1g								No.39		61-2
40	石製品	砥石	泥岩 長：7.9cm 幅：3.5cm 厚：3.5cm 重：109.7g								No.30		61-2
41	土製品	土錘	孔径：0.5cm 長：5.6cm 径：1.9cm 重：16.8g				100		にぶい黄褐			61-1	
42	鉄製品	不明品	現存長：3.3cm 幅：2.0cm 重：3.5g							No.10		56-6	

第8号住居跡 (第80図)

F-6・7グリッドに位置する。第1号柵列、第43号土坑と重複している。新旧関係は、第1号柵列より古く、第43号土坑より新しい。平面形は正方形で、東西2.68m、南北2.72m、深さは0.11~0.31mである。主軸方位はN-39°-Wを指す。

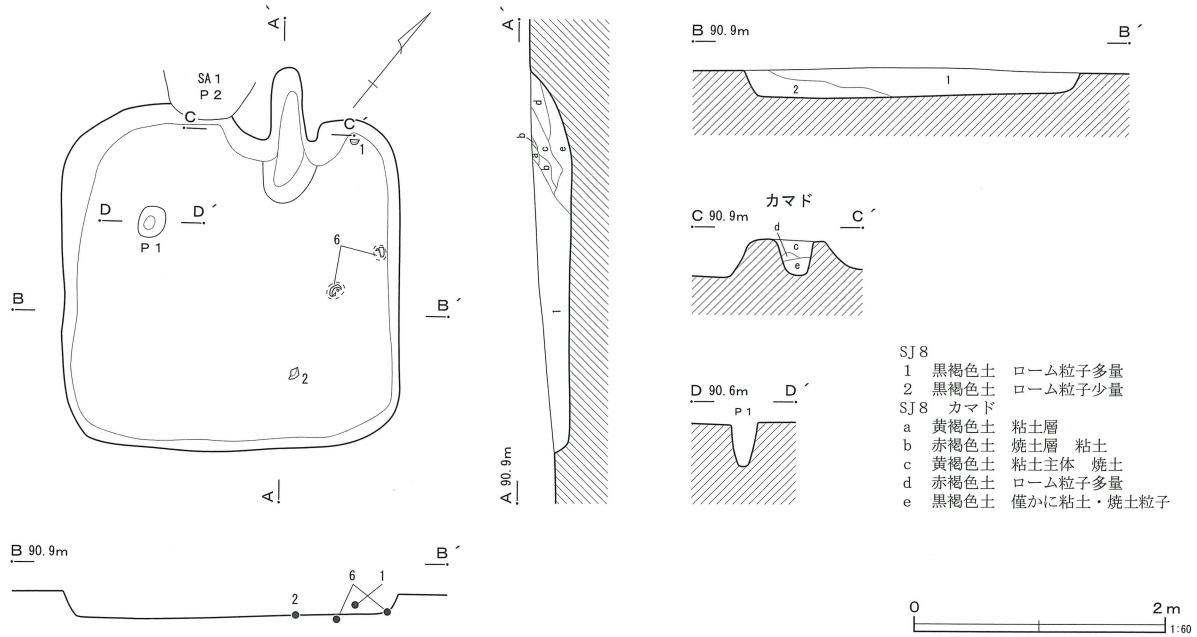
床面はほぼ平坦で、壁は開きながら立ち上がる。覆土は2層で、短時間で埋没したと考えられる。

カマドは北壁中央より東寄りに設置される。燃焼

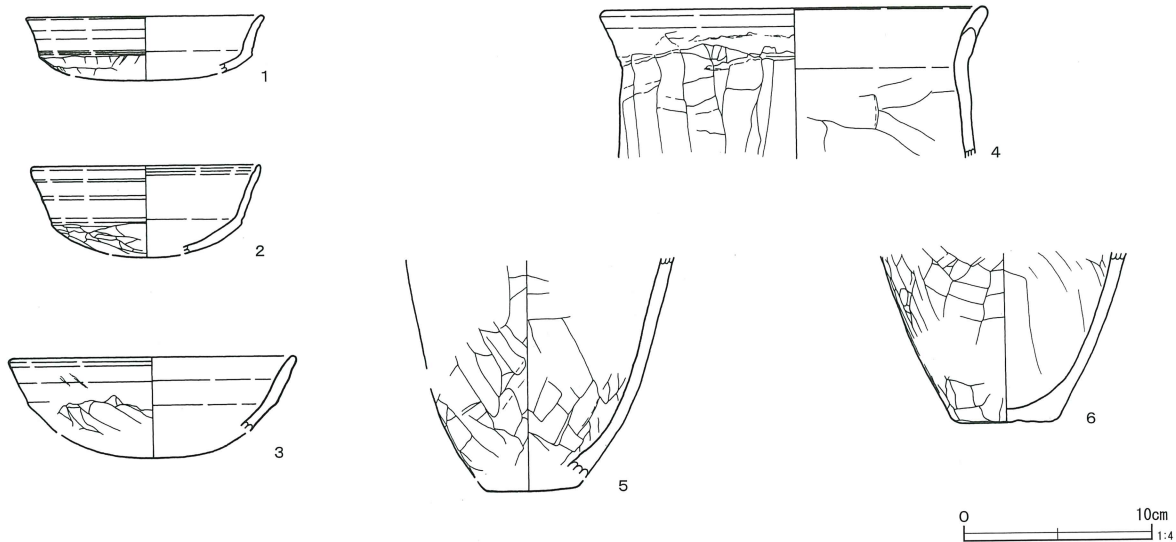
部の掘り込みはなく、緩やかに立ち上がりながら煙道となる。覆土最上層に黄褐色粘土層(a層)、その直下に焼土層(b層)が観察された。袖は地山で構築されていたが、周囲には崩れて流れた状態の粘土が確認された。

貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。ピットは1基検出され、深さは34cmである。

出土遺物は少量で、接合率は悪く、図示したものに残存率は低い。須恵器は認められなかった。



第80図 第8号住居跡



第81図 第8号住居跡出土遺物

第19表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第81図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	熟(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版
1	土師器	坏	(12.6)	(3.1)	—	C・H・I	20	良好	橙	No.1.カマド	内外面炭化物付着	
2	土師器	坏	(12.0)	(4.7)	—	C・H・I	10	普通	橙	No.6	体部外面にぶい黄褐 磨滅顕著	
3	土師器	坏	(15.0)	(3.9)	—	C・E・H・I	10	良好	にぶい橙	カマド	歪みあり	
4	土師器	甕	(20.0)	(8.0)	—	C・E・H・I	20	良好	黒褐色			
5	土師器	甕	—	(11.5)	—	C・G・H・I	40	普通	にぶい赤褐	カマド		
6	土師器	甕	—	(8.8)	(5.6)	B・G・H・I	40	良好	橙	No.2・3・4		

### 第10号住居跡 (第82図)

F-2・3、G-2・3グリッドに位置する。北側約1/3は調査区域外にある。第4号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。一辺が4.00m前後の正方形になると考えられる。深さは0.33~0.56mである。主軸方位はN-62°-Eを指す。

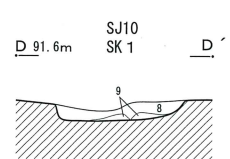
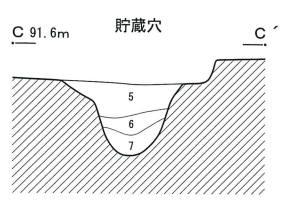
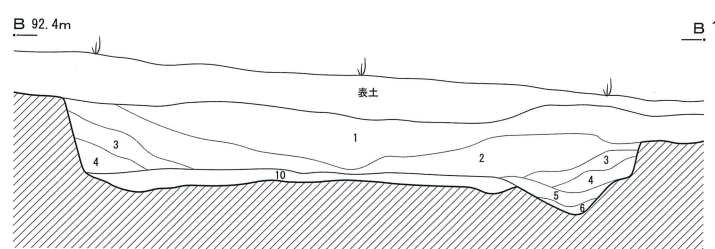
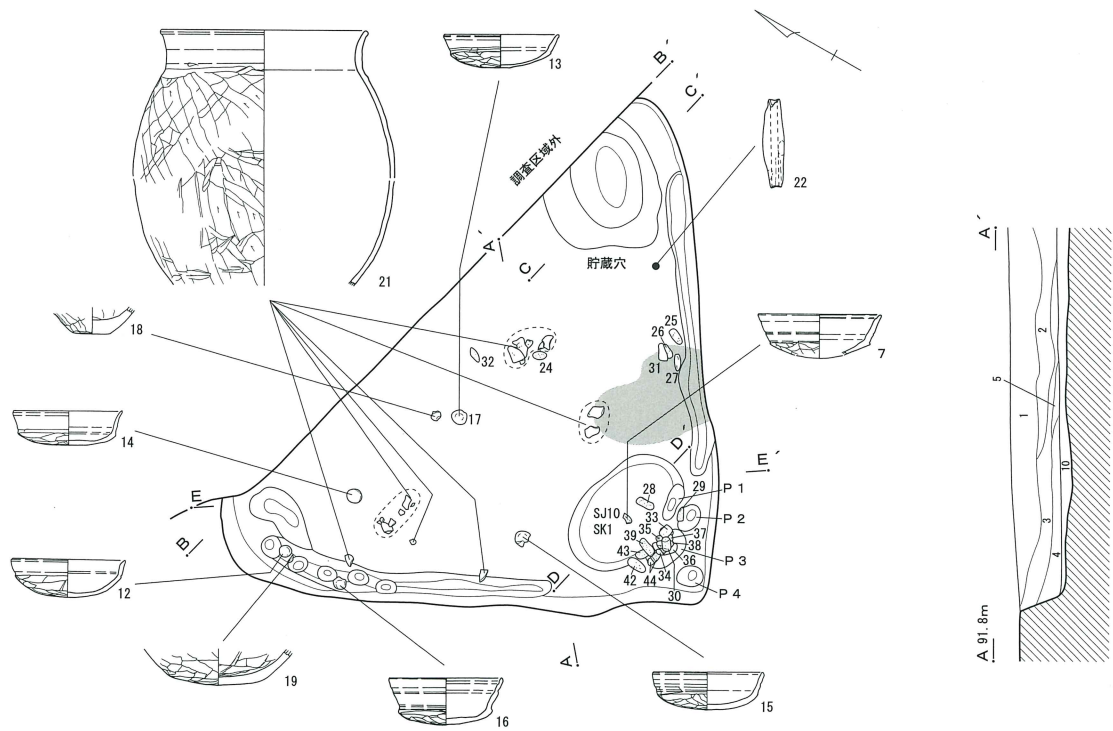
床面は僅かな起伏が見られ、壁は開き気味に立ち上がる。覆土は自然堆積と考えられる。床面に貼床が確認された(10層)。

カマドは検出されなかった。貯蔵穴の位置から調査区域外にある北東壁に設置されていると考えられる。

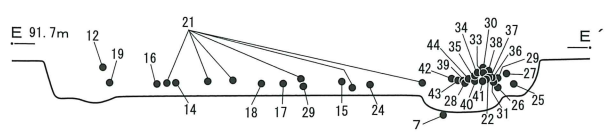
貯蔵穴は東コーナー近くに検出された。一部が調

査区域外になるが110×90cm程の楕円形になるものと考えられる。深さは63cmである。壁溝は検出された南東壁と南西壁で見られ、コーナー近くでは途切れていた。幅14~24cm、深さ1~8cmである。南西壁の壁溝内には深さ2~4cmの小ピットが検出された。南コーナー近くで住居内土坑が検出された。105×67cmの楕円形で、深さは14cmである。底に暗褐色粘土が確認された。ピットは土坑の際で4基検出された。深さはP1から11cm・11cm・14cm・4cmである。

遺物は多量に出土したが、図示した土師器甕以外は接合率が極めて悪い。編物石が南コーナーに集中して出土した。須恵器は認められなかった。

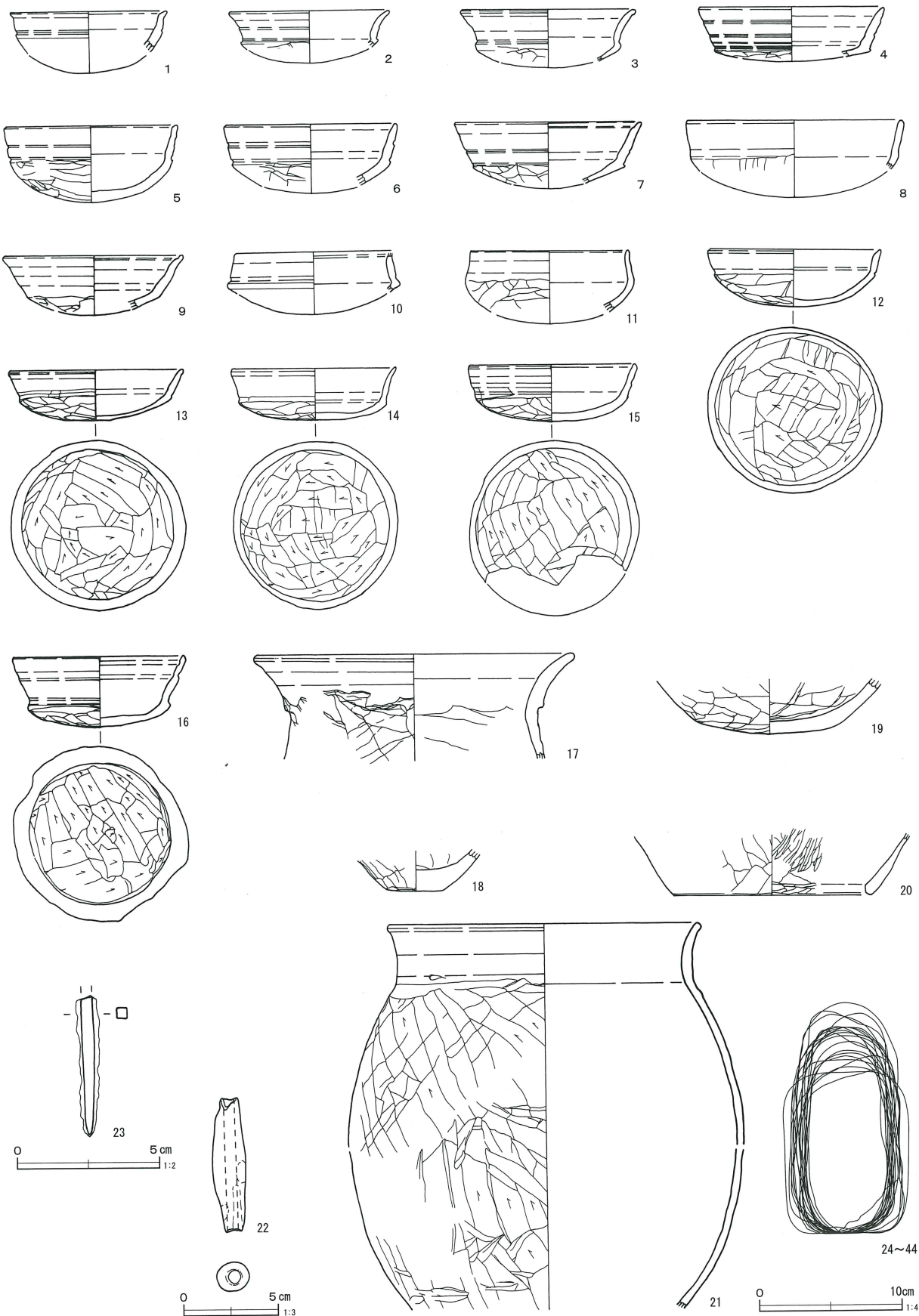


- SJ10
- 1 褐灰色土 ロームブロック・黒色土まだらに混入
  - 2 褐灰色土 灰白粘土多量
  - 3 黒褐色土 僅かに炭化物・焼土ブロック
  - 4 褐色土 ロームブロック・黒色土粒子多量
  - 5 暗褐色土 ローム粒子多量
  - 6 黒褐色土 炭化粒子・ロームブロック少量
  - 7 黒褐色土 ロームブロック
  - 8 褐色土 ロームブロック多量
  - 9 暗褐色土 粘土層
  - 10 褐色土 貼床 ロームブロック ローム粒子 黒色土粒子



第82図 第10号住居跡





第83图 第10号住居跡出土遺物

第20表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第83図)

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土・石材	残存(%)	焼成	色調	出土位置	備考	図版	
1	土師器	坏	(11.0)	(2.9)	—	C・G・H・I	5	良好	橙				
2	土師器	坏	(11.0)	(2.6)	—	A・C・H・I	10	良好	橙		絹雲母片岩か?		
3	土師器	坏	(12.0)	(3.6)	—	C・E・H・I	20	良好	にぶい橙	貯穴			
4	土師器	坏	(13.0)	(3.5)	—	A・C・H	30	良好	橙		胎土精緻		
5	土師器	坏	12.0	(5.3)	—	C・E・H・I	30	良好	明赤褐		炭化物付着		
6	土師器	坏	(11.0)	(4.3)	—	A・C・H・I	10	良好	橙		胎土精緻		
7	土師器	坏	(13.0)	(4.2)	—	B・C・H・I	20	良好	橙	No.22			
8	土師器	坏	(15.0)	(3.5)	—	C・H・I	20	良好	にぶい橙				
9	土師器	坏	(12.4)	(3.7)	—	H・I	20	良好	にぶい橙				
10	土師器	坏	(11.0)	(2.7)	—	C・I	10	良好	黒褐				
11	土師器	坏	(11.0)	(4.3)	—	C・H・I	25	良好	にぶい褐		胎土精緻 内面黒色		
12	土師器	坏	12.3	4.1	—	H・I・K	100	良好	橙	No. 1		57-7	
13	土師器	坏	12.4	3.5	—	B・H・I	100	良好	橙	No.17		57-8	
14	土師器	坏	11.3	3.5	—	C・H・I・K	100	良好	橙	No. 6		57-9	
15	土師器	坏	11.6	4.0	—	C・E・H・I	80	良好	橙	No.14		57-10	
16	土師器	坏	12.3	4.9	—	B・I	90	良好	褐	No. 3		58-1	
17	土師器	甕	(22.0)	(7.2)	—	B・C・E・H・I	30	良好	にぶい橙				
18	土師器	甕	—	—	4.0	B・C・E・G・H・I	80	良好	にぶい橙	No.15	剥離顕著		
19	土師器	甕	—	—	10.0	C・H・I	50	良好	橙	No. 2			
20	土師器	甕	—	—	(14.0)	C・I	10	良好	褐灰				
21	土師器	甕	(21.5)	(27.0)	—	B・D・E・I	60	良好	橙	No.5・6・7・9・11・18・19		54-1	
22	土製品	土錘	孔径：0.6cm 長：7.1cm 径：1.7cm 重：16.4g					100		明黄褐	No.24		61-1
23	鉄製品	釘	現存長：4.9cm 幅：0.4×0.4cm 重：4.7g										56-6
24		編物石	重：277.3g			閃緑岩				No.31			
25		編物石	重：707.7g			砂岩				No.32			
26		編物石	重：746.7g			絹雲母片岩				No.34			
27		編物石	重：665.5g			ホルンフェルス				No.33			
28		編物石	重：629.2g			閃緑岩				No.36			
29		編物石	重：476.1g			砂岩				No.37			
30		編物石	重：607.8g			砂岩				No.39			
31		編物石	重：633.6g			絹雲母片岩				No.35			
32		編物石	重：354.0g			砂岩				No.29			
33		編物石	重：491.0g			砂岩				No.40			
34		編物石	重：568.6g			砂岩				No.45			
35		編物石	重：474.2g			砂岩				No.44			
36		編物石	重：471.3g			砂岩				No.43			
37		編物石	重：666.4g			砂岩				No.42			
38		編物石	重：525.3g			砂岩				No.41			
39		編物石	重：676.5g			砂岩				No.46			
40		編物石	重：372.0g			緑泥片岩				No.51			
41		編物石	重：(568.0g)			砂岩				No.50			
42		編物石	重：623.7g			緑泥片岩				No.49			
43		編物石	重：575.1g			砂岩				No.48			
44		編物石	重：556.2g			砂岩				No.47			

第11号住居跡 (第84図)

E-6グリッドに位置する。東西方向に第2号溝跡によって浅く削られ、床面中央にピット状の攪乱が見られた。平面形は東西に僅かに長い長方形で、長軸3.30m、短軸2.88m、深さは0.04~0.21mである。主軸方位はN-26°-Eを指す。

床面はほぼ平坦だが、僅かに北西側が高くなる傾向が見られる。壁は開きながら立ち上がる。覆土は2層で、短時間で埋没したと考えられる。床面に貼床が確認された(7層)。

カマドは北壁中央よりやや東寄りに設置される。燃焼部は5cm程掘り込み、開きながら立ち上がり、